

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第11回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：11月25日（日）1日目

大学名：北京大学

氏 名：于曉霞

今日のほとんどのスケジュールは慌しい中で過ごしたが、日本の印象は私を震撼させるのに充分だった。その中で最も強い感動を覚えたのは、日本のサービスが人の身体や心に喜びをもたらしてくれるということだ。この点に関しては、今朝、日航の飛行機に乗ったときからすぐに強く感じていた。すべての乗務員の話しぶりはとても礼儀正しく真心がこもっており、乗客の要求に対しては常に笑顔で応対し直ぐに処理してくれる。出迎いのバスの運転手さんも何事に対して多少しも手を抜かず、トランクもきっちりときれいに積み込んでくれた。夕食のレストランの従業員もひっきりなしにテーブルとテーブルの間を往復し、私たちに一生懸命サービスしてくれた。実際、これらのサービスは中国でも享受することができるのだが、この日本人たちは、自分の仕事に対して深い愛情を持っているんだと私に感じさせてくれた。みんなサボることなく、大変一生懸命頑張ってやっていた。この点について私は、つまり彼らのサービスの対象である私は、彼らの熱意のこもった勤勉な姿勢に感化されてしまった。これらの人達の背中から、私は初めて日本人という民族の、生活を愛し、意欲的に前進するという民族精神を感じ取ることができた。

成田空港から市内に入る道すがら、私が最も気になったのは町の環境である。環境学院で学ぶ学生として、現在の中国の環境が劣悪であることをよく知っている。私たちの世代が早急に改善しなければならない問題である。東京の緑化率はとても高く、心を和ませ目を楽しませてくれる。しかも、北京との一番の違いは空気の質の差である。北京を離陸したとき、空気中には消えてくならない煙塵があったような気がしたが、東京に着陸する際には、すでに透き通ったきれいな新鮮な空気になっていた。確かに、日本の海洋性多雨という気候は汚染物質を洗い落としてくれるのに有利だが、私は最も重要なのは、日本の汚染処理技術が発達していることだと考えている。ゴミ焼却を例にとると、北京にゴミ焼却場を建てようとする場合、近隣住民の反対デモが起り、最終的に取止めるしかない。しかし、東京のゴミ焼却場は子供たちが遊ぶ「夢の島」に変わり、観光客の楽しむ場所となっている。この両者の違いに私は驚いた。もし中国の汚染物質排出企業がすべて日本の企業と同様に、汚染をエネルギーに変え、汚濁をクリーンに変えることができるなら、中国の汚染問題は当然自然と解決するでしょう。今後どれほどの歳月が経てば、中国の工場や企業は日本と同じように、住民と平和的に共存することができるのだろうか。

日本の美食にもとても興奮した。手の込んだ各種お菓子、街角の軽食、伝統的な居酒屋など、それぞれに特色がある。しかもそれらのお店の看板はどれも大きく、中には巨大な機械の模型を置いて特徴をアピールしているお店もある。以前テレビでしか見ることでできなかったこういったありさまが、今日ははっきりと目前に展開され、手に触れられるところにあるのだ。旅というものは自分の視野を絶えず一新していく過程である。わずか半日の日本滞在ではあるが、私はもうすでに深く感じ入り、さらにより多くのことを知りたいと思った。この12日間は私にとってこの上もなく充実した、極めて収穫の多い旅となると信じている。

今日ただ一つの心残りは、宿舎に到着したのが大変遅かったため、天守閣の夜景を見に行くことができなかったことだ。天守閣は大阪にある古城で、今は大阪のシンボルとなっている。日中両国の特色が溶け合った楼閣で、この工業都市の中にあって格別な静かさと威厳を放っている。カーテンを開けると、灯りに彩られた天守閣の美しさと、天守閣が守る大阪城の愛おしさに思わず感嘆してしまった。

おやすみなさい、天守閣。

日 付：11月25日（日）1日目

大学名：北京師範大学

氏 名：喬天源

1日中飛行機に乗り、しかも2回乗り継いだので本当に疲れたが、成田空港に到着した時、本来なら興奮しているはずなのに、外国へ来たという感じがしなかった。成田空港は首都空港と同じく近代的で、到る所に漢字が溢れていた。一瞬自分がまだ北京にいるような感じがした。傍らを通り過ぎる女の子が甘えた声で母親に「ママ、トイレ行きたい」というのを聞いた瞬間、突然ハッと意識を取り戻し、ああ、本当に外国に来たんだと実感した。

飛行機の客室乗務員であろうと、夕食のバイキング会場のサービス係であろうと、そのやさしい笑顔と細やかなサービスはみんなの心をほのぼのとさせ、行き届いた親切なサービスに確かにわが家に帰ったような気がした。

夕食のバイキングは牛肉と羊肉のしゃぶしゃぶだった。初めての本場の日本料理と言えるだろう。みんなとても楽しく食事をとったが、それは初めて外国に来たという興奮もあるからなのだろう。もちろんお腹がペコペコだったという無視できない面も確かにある(笑)。

ホテルに戻り、窓を開けると思いがけず前方正面に天守閣があった。澄み切った灯りと周囲の木々の緑がお互い引き立て合い、そこには静寂やもの寂しさそして、厳粛さや世の移り変わりの激しさが漂っていた。明日の朝早起きして天守閣を見に行こうと、文さんと約束した。

すぐにでも知りたいという新鮮味により、まだまだ気持ちが高ぶっていた。明日は天守閣から始まる。自分の目で、耳で、鼻でたつぷりと日本を感じよう。身近にあるすべてのものに触れ、今回の旅を満喫しよう。

大変楽しみにしております！

日 付：11月25日（日）1日目

大学名：北京化工大学

氏 名：黄改

2012年11月25日、この日は私の人生の中で最も思い出に残る一日だった。今日はまるで夢のように終わってしまった。私はこれまで、自分が外国に行くチャンスに恵まれ、別の文化に触れ、別の国に身を置き、こんなにはっきりとその国の脈拍を感じることができるなんて、考えたことがなかった。今日は訪日の初日だというのに、私はもうしきりに驚き、感心ばかりしていた。

全日空と日航の国際線と国内線の飛行機に乗ったが、最も行き届いた、最も人にやさしいサービスとは何なのかを深く理解させてくれた。空港のスタッフであれ客室乗務員であれ、私たちの旅が快適なものになるよう、みんな心からの笑顔で接してくれた。例えば、細かいことでは、テレビのチャンネルを合わせてくれたり、いろんな種類の飲料を用意してくれたりした。大きなことでは、乗客を安心させるよう、みんながシートベルトを着用しているかどうかチェックしたり、飛行状況を随時アナウンスしてくれた。

バスの中では、呂純明さんと渡辺さんが車窓から見える場所や物に隠されている日本の科学技術やその将来的見通しを紹介し、私はその都度日本人や日本という国に感服した。日本人は、昔から時間厳守し、法律を守り、何をするにしても、最も合理的な材料を使い、最も質の良い、最も人のニーズに合致するというを極力努力して行い、また、教育を国の発展の最優先課題として位置づけ、物事を鵜呑みにせず、小さなことを基礎に、着実に大きなことを成し遂げている。ここまで書いて、私はふと気がついた。つまり、この緻密さや真面目さを拠り所として、日本は世界の強国の一つとなり、またその後も進歩を続けている。

今日の旅程の中で強く印象に残っているものとして他に日本の環境がある。飛行機から見た整然とした田畑、大きく広いグリーンベルト、バスの車窓から見えた道路の両側の青々とした並木、青く透き通った海水と青い空。このことも、高度経済成長と環境保護は両立できるということを、私たちにはっきりと認識させてくれた。

今この時まで、私は飛行機に搭乗したあの瞬間と同じように、気持ちが高ぶっている。日本——ここにはまだまだ

私が学び、感じるべきことがたくさんある。私はその息吹に寄り添いながら、日本と一体化し、真に日本を理解し、日本を好きになるだろう。

日 付：11月26日（月）2日目

大学名：北京師範大学

氏 名：文勝男

今日は日本での公式日程の2日目であるが、初めての企業訪問の日であった。午前中はPanasonicエコテクノロジーセンターを見学し、大変な衝撃を受けた。一台の廃棄処分されたテレビ、エアコン、冷蔵庫にあんなに多くの利用可能なものがあり、回収した資源をリサイクルして、商品を再生産すればどれほど多くの資源を節約することができるのだろうか。プラント設備を前にして説明を聞いていた私はふと、日本語を学んでいることは喜ぶべきことで、学んだことを実際に役立てることができるのは、この上ない満足感を感じさせてくれるものだと思った。中国の現在のリサイクルの状況と比べてみれば、厳しい現実が心に痛む。可能であるなら、将来中国がこのような設備を導入し、環境保護のための一助とすることができれば、日本語を学んだことも無駄にならないのではないかと感じた。

でも、私には疑問も残った。Panasonicが回収した家電製品は4、5種類だけだが、その他の家電製品はどうするのだろうか？回収の専門会社或いは組織が回収しているのだろうか？或いはその他の家電製品は大型ではないので回収しないのだろうか？質疑応答の際に挙手したが、時間の関係で質問する機会がなかったことが少し残念である。

午後のプログラムにも感動した。まず、高台寺で茶道体験をした後、清水寺を見学した。高台寺は豊臣秀吉の妻である高台院が修行したお寺なので、高台寺と呼ばれている。私は今学期の「国慶節」の長期休暇の際に、40数回にわたるNHK大河ドラマ『江～姫たちの戦国』を数日間かけて見ていた。私はこのテレビドラマで初めて高台院のことを知ったのだが、彼女の身の処し方は賞賛に値する。その当時は、自分がこんなに早く高台寺に来るチャンスに恵まれるなんて考えたこともなかったのにと感じたとき、私は自分が本当にラッキーで幸せ者だと思った。

私は日本語を学んでいるので、平素の勉強の中でも日本の社会、文化等について理解を深めることはできる。茶道については、ビデオ、書籍等を通して勉強したことはあるが、今回実際に茶室にて日本の伝統である正座により茶道を体験した。このような体験は書籍では出来ないもので、私は再度自分の幸運を感じた。

日 付：11月26日（月）2日目

大学名：北京化工大学

氏 名：白智群

今日は来日2日目、主要プログラムの初日であり、見学のテーマは環境保護である。

Panasonicエコテクノロジーセンターは松下の会社である。こういう大企業は利益のみを重視するというのが私の印象だが、しかし、Panasonicエコテクノロジーセンターは意外にも利益はほぼゼロであり、国の環境保護に貢献すべきとするその理念はとても貴いものである。これ以外にも、Panasonicは地域との共存も重視し、常に近隣の住民に対しPanasonicは近隣住民の生活に影響を与えることはしないと説明しているが、中国国内ではこういった状況は非常に稀である。

大企業は国の環境保護に貢献するという理念を持ち、日本人も環境保護の重要性を認識している。このことがPanasonicの事業が成り立つ主な要因となっている。日本人が使用済み家電のために2000円～5000円の処理費用を支払って、使用済み家電の回収リサイクルを支援する必要があるということを誰が想像できるだろうか。将来中国も日本と同じようにこういう処理をしてほしいと思っているが、その実現はそんなに遠いことではないと私は信じている。なぜならPanasonicはもうすぐ杭州に同様の工場を設立し、我々の回収リサイクルを手助けしてくれることになっているからだ。

私は高台寺と清水寺の見学で日本の美しい景色を堪能し、茶道体験によって文化を守ることの重要性を理解した。今日のプログラムでは多くの驚きと喜びがあった。明日を心待ちにしている。

日 付：11月26日（月）2日目

大学名：外交学院

氏 名：韓旭

今日は全員で兵庫県にあるパナソニックエコテクノロジーセンター（PETEC）を見学した。このセンターではたくさん のことを学んだが、それと同時に日本人がリサイクル技術を重視し、その実現のために努力していることに感動を覚えた。回収したすべての家電製品はまず分解、分類、粉碎し、その後選別という工程を経なければならないので、回収物の分類収集技術が決定的な役割を担っている。中でも「近赤外線プラスチック選別機」というプラスチックを分類する先進的な機械にみんな強い関心を持った。この機械は、材質の異なるプラスチックが近赤外線を反射する波形と波長の違いを利用し、圧縮空気を正確に吹き付けることにより、加速度と慣性を用いてターゲットであるプラスチック材料を打ち落とし回収するものである。この機械の原理は大変簡単だが、発想はすばらしい。この他、フロンガスなどの回収方法についても、みんな強い興味を示した。松下がこの産業でわずかな利益しか得てないということを知ったみんなには疑問が生じた。わずかな利益しかないのに、なぜこんなに多くの労働力や物資をこの産業に投資するのだろうか？企業の創業目的と相矛盾するのではないか！しかしながら私は、そういった中で松下に勤務する人達、そして「有料回収」を支持している60%の日本の国民の価値観が、この当面の状況に対して決定的な役割を果たしているのではないかと考えている。日本では、「粗放型」の経済発展モデルはすでになくなり、資源に乏しい国としては、自国の持続可能な発展ということを考えざるを得ないのだ。これは百年の大計である。廃棄物のリサイクルはその中の極めて重要な一部分であり、その公益的意義は経済的意義を大きく超えている。資源がないということは、よりよい生活どころか、基本的な生活すら保証できないかもしれないのだ……。変革が起こるくらい、より多くの中国人がこのことに気付くよう、心から願っている。

昼食後、私たちは日本の美しい古都——京都を訪問した。雨に煙る京都の町は少し寒かったが、かえって静謐をもたらし、世の変転を感じさせてくれた。私たちはまず高台寺を訪問し、茶道を体験した。40分間余の正座にはなんとか耐えたが、その代償はかなり大きかった。数時間後私がホテルに戻り休憩するまでずっと、足の先が痺れていた。正座を終えた直後はなおのことひどく、立つことさえできなかったのだ！茶道の先生が立てて下さったお茶はとても美味しく、前かがみでお茶を立てているときの先生の所作はとても上品で控えめで、「大和撫子」を彷彿とさせた。

その後、私たちは慌しく清水寺に向かった。すでに黄昏が近づき、小雨が降る中、私たちは世界的に名を馳せる神社を参拝し、様々なお守りを買ひ、おみくじも引いた。結果は半吉だったが、今までくじに当たったことなど一度もない私は、この「吉」とついたおみくじを引き当てたことがとてもうれしかった。もちろん、清水寺に来たからには、「鎮寺の宝一音羽の三泉」を見逃すわけにはいかない。私は幸運にも財運のご利益のある水を飲むことができた。

当日の夜、私たちは京都の噂の「懷石料理」を味わった。聞くとところによれば、懷石料理は日本ではお客様をもてなす際の最高級の料理だということである。でも、残念なことに、私は生ものが少し苦手なので、この懷石料理の雅な趣を充分味わうことができなかった。

ここで特に取り上げたいのは、京都ではいたるところで紅葉のグラデーションが見られ、この古都の町をより一層優雅な雰囲気包んでくれたということだ。清水寺の境内から遥か遠くに目をやると、多くの緑に混じったその深紅が感動的で美しく、小雨に洗われて更に一層鮮やかさを増し、そのまばゆさに私は目を奪われた。

時間の関係で、京都の街をそぞろ歩きしながら名物を味わうことができなかったことが、残念でたまらなかった。私は、必ずもう一度この町に来ようと思った。

日 付：11月27日（火）3日目

大学名：北京理工大学

氏 名：蘇杭

毎日がとても充実していて、一日一日それぞれ新たな収穫があった。今日私たち訪問団は防災センターを見学し、午後は同志社大学の学生たちとの交流を図り、お互いの共通の関心事について討論を行った。また、大学で丁度行われていた「学園祭」を見学し、最後に同志社大学の友人達との懇親会に出席し、お別れとなった。

日本は地震帯に位置する地震多発国であるが、このような情勢に対し、国や国民全体が、各種の状況を改善するために努力している。自然災害に対して人類はなすすべもないが、人々のさまざまな取組みにより、災害のもたらす損失を大幅に減らすことができる。国は多くの対策、例えば、建物を補強する、建物の基礎地盤を厚くする、地震防止指揮センターを設立するなどさまざまな対策を講じているが、人々は自分の置かれた状況を決して否定的には捉えず、逆により一層結束し、知恵を絞り、積極的に乗り越え、この状況がもたらすであろう最悪の結果を改善しようと努力している。私たちの目の前にいるのは、たくましく、自信にあふれた、勇敢に困難に立ち向かう強い民族である。防災センターはただ単に展示しているだけでなく、これまで起こった地震を追悼し、人々に警告し、重視するよう促すとともに、如何にして災害を防止するか、地形を利用してどう自分や家族を守るかといった内容も含まれている。このような防災センターの存在は国内外の多くの人々にこういった危機意識を持たせ、より一層地球を愛し、一生懸命働いて、身近な人を大切にするなど、根本からすばらしい考え方を育んでくれるのである。これは、国の発展にとって非常にプラスになることである。

同志社大学の学生との交流は大変楽しいもので、私にとって非常に忘れがたい思い出となるだろうと思っている。私の人生において、こんなにたくさんの外国人と心おきなく話したのは初めての経験であり、両国、ひいては全世界の友好を思う気持ちをはっきりと感じた。文化的背景は異なるが、私たちと同じく活力ある潑刺とした青年たちとの交流で、友情や討論の結果以外にも、視野の拡大、思考の解放を得ることができた。しかも今年は、日中国交回復40周年という記念すべき年にあたり、また多くの課題に直面している時期なので、日本の大学生とこのような交流の機会を持つことは非常に意義深いことであり、重要な意味がある。私たちの討論グループのグループ長である平田篤史先輩は、とても親切な方だった。彼は私たちとの活動に楽しそうに参加し、上手な英語を操り私たちとのコミュニケーションもスムーズに進んだ。私たちのグループは「両国の若者たちのトレンド」について十分に話し合った。その中で私たちは、両国の同年齢の人達には多くの共通点があり、また面白い相違点が存在していることに気が付いた。それ以外に最も印象深かったのは、平田先輩が、日本の学生は中国のことが好きで、友好的な気持ちを持っていると教えてくれたことである。日本には、中国に対して偏見を持ったり、良くない見方をしている人はいない。このことは、今回の交流イベントへのボランティアの申し込みにもはっきりと表れており、多くの学生が中国の大学生との交流に関心を持っていた。

懇親会が終了し、私たちがバスに乗り会場を離れる際、車窓の外は離れがたい気持ちで一杯の温かい人達であふれ、車窓の中には同じく別れがつかなくて、感動で胸が一杯になった私たちがいた。

車窓の内と外には、中国と日本という2つの国の人達がいたが、友好の思いがお互いをしっかりと結びつけていた。私たちは両手を挙げ、お互いに手を振りながら別れを惜しんだ。2012年11月27日、日中両国の大学生同士の貴重な友情、この感動的な場面は永遠に私の記憶に残るだろう。

日 付：11月27日（火）3日目

大学名：北京師範大学

氏 名：朱曼青

今日は訪日の三日目である。毎日大変充実しており、様々なスケジュールがびっしり無駄なく組まれており、日本人の時間厳守の習慣を改めて感じた。

私は向学心に火がついたように早朝からホテルのロビーにおいてコンシェルジュに話しかけ、目にした日本語を手当たり次第カメラに収めた。日本の美しい文字にも日に日に慣れてきて、目新しい単語を見つけると胸が高鳴った。

今日、最初の訪問先は阪神淡路大震災記念館・人と防災未来センターである。ここでは2二人の華僑のボランティアの方にお世話になった。私達の訪日スケジュールなどを熱心に尋ねて下さり、その台湾、香港訛りの中国語には親近感が湧いた。特に年配の方が話す中国語は時々日本語の「ね」が混じっており、優しさ以上にお年寄り特有の可愛らしさを感じた。ここでは映像を通して阪神淡路大震災の惨状を目の当たりにした。私達にとっては中国の四川大地震も記憶に新しいところだが、このセンターでは震災当時の映像が生々しく記録されており、崩れた壁やその惨状を目にすると胸が押しつぶされるようなより強烈な衝撃を受けた。また、翻訳自動案内機が足らなかったのも私達日本語専攻の学生は翻訳機なしでの見学となったが、日本語のブラッシュアップにはいい機会となった。どの展示も大変興味深く、映像を見た後はボランティアのお二方から色々な模型で日本の耐震建築の原理や応用について説明頂いた。耐震、免震構造には莫大なコストがかかるが、日本のような地震多発国には必要不可欠である。日本はちょっとした技術原理を実践に应用到することに非常に長けていると感心した。

昼食には初めて温めたお弁当を食べ、その後、同志社大学へと向かった。

実は同志社大学は中国ではあまり知られておらず、私自身も同志社大学についての知識はほとんどなかった。しかし、今日の午後の交流で同志社大学に好感を持った。キャンパス内は清潔で整然としており、建物がバランスよく配置され、学生達も親切で礼儀正しく、初めて参加した学園祭はどれも大変印象に残った。グループ別のディスカッションでは同志社の学生さんは私達が聞き取り易いようにゆっくりと話してくれた。また学園祭の合間には同志社の学生さんにたこ焼きをご馳走になった。ずっと前から食べたいと思っていたタコ焼き、本場の味とまではいかないが、学生さんの手作りということでより一層美味しく感じた。

私は彼らの明るく誠意の溢れる笑顔、創造的な考え方がとても好きだ。彼らと接していると日中間の政治的な摩擦などは元から存在せず、友情あるのみという気さえした。

今、私は新幹線でこの日記を書いている。先程の整然とした乗車風景を思いながら、明日への期待がより高まった。

日 付：11月27日（火）3日目

大学名：中央民族大学

氏 名：劉詩堯

昨晩は2時近くに就寝し、今朝は6時半にモーニングコールで起こされ身支度を整えた。今日一日ハードスケジュールだったのでさすがに疲れ、京都から名古屋の新幹線の中では眠くて仕方なかったが、本当に充実した一日で、日本の友人もできた。

午前中は神戸の阪神淡路大震災記念館・人と防災未来センターを見学し、1995年に発生したマグニチュード7.3の阪神淡路大震災を再現した3D映像と震災前後の被災地の比較映像等を見た。地震発生後、瞬く間に家屋は倒壊し地盤が沈下し、僅か10分足らずの間に街全体が廃墟と化し、瓦礫の山となった。何万トンもの瓦礫の回収と復興には10～20年かかるとされ、復興までの期間多くの被災者は慣れ親しんだ我が家を離れ仮設住宅での生活を余儀なくされた。しかし、こうした災害の後こそその民族の底力と意志が試されるのだと思う。大地震と言えば中国でも震度8の四川大地震により一つの都市が一瞬にして廃墟と化した。四川大地震では全中国人は一丸となり力を合わせ被災地に支援の手を差し伸べた。そして僅か1ヶ月で被災者は安全な生活を送れるようになったのである。阪神淡路大震災も震災の半年後には瓦礫が見事一掃されたわけだが、ここには祖国を愛し困った人がいたら手を差し伸べるという日中の共通点があると思う。またこうした時こそ真の人間性が問われるのだと思う。ビデオの中に震災で姉を失った少女が登場したが、この少女は避難所で人々の温かさに触れ互いに励まし助け合う中で再び生きる希望を見つけ、人生の目標を持つことができるようになった。このように人の逞しさ、命の輝きは安きに居て危うきを思うという心構えと常に感

謝の気持ちを忘れてはならないと私達に教えてくれている。

午後は同志社大学を訪れ、同志社の学生さんと討論をした。私はアダムがリーダーを務めるFグループになり、各テーマの中でも一番面白そうな「parents' perspectives on students' love」(学生の恋愛についての親の考え方)について討論をした。日本と中国の親の考え方の違いから両国の習慣、若者の恋愛観や恋愛の仕方、そしてプロポーズ、婚約、結婚、ハネムーン、結婚相手に求める条件などについて大変意義深い話し合いができた。また同志社の学生さんと英語で交流出来たことは、これまで学んできた英語力を試すいい機会でもあり、私自身としても楽しむことができた。夜の懇親会では日本の学生さんからプレゼントを頂き、互いの連絡先を交換した。大菅さんは楽しく美しい日本の歌を持ってきて、浅井さんは簡単な日本語を私に教えてくれた。皆さん本当にありがとう。お別れの時は本当に名残惜しく、手を振ることしかできないのがもどかしく感じた。あの次第に小さくなっていく姿はいつまでも私の胸に焼き付いている。

今日はここまで。明日は何と言っても温泉が楽しみだ。

日 付：11月28日（水）4日目

大学名：北京化工大学

氏 名：胡齊峰

今日はトヨタ自動車堤工場を見学した。トヨタ自動車は日本の自動車市場の半分以上を占める自動車業界最大手である。またハイブリッド車の技術は世界トップレベルにある。

堤工場ではまずはんだ付けの工程を見学した。補助ロボットが車のボディの千カ所にも上るはんだ付けをすごいスピードで正確にこなしていた。私は電子情報工学の自動化が専攻なので良く分かるのだが、このように高速で正確かつ複雑なはんだ付けの作業は、簡略化を進めた大量のプログラムコードによって支えられているのである。また、正確な位置の把握にはどのような技術が採用されているのかまだ私には分からないが、恐らく理論上は平面から立体への変換を行えばよいのだと思う。いずれにせよ、これは沢山の従業員の知恵の結晶に他ならない。続いて出荷前検査の過程を見学した。トヨタの自動車は店頭に並べられる前に千項目余りの安全チェックを受けていることを知った。経験を積んだ作業員が一つ一つチェックしていく。また品質を保証するためこのラインの照明は一般の照明よりも3倍明るく設定されており、欠陥商品が市場に出回らないよう厳しくチェックされている。トヨタの生産ラインにはある特別な仕掛けがある。白い紐とアンドンと呼ばれる電光表示板だ。アンドンには生産ライン上の各工程番号が表示されるようになっており、作業員が異常を見つけ白い紐を引くとアンドンにその異常が表示される。アンドンに工程番号が表示されるとチームリーダーが状況を把握し、問題解決後に再度白い紐を引くとアンドンの表示が消える。これはトヨタの「自動化」の作業理念を象徴しているといえる。従業員が問題を発見するのを奨励し、会社側もこの白い紐を引くことを提唱しているのである。こうすることで問題が発生しても出荷品質をしっかりと保証できる。このようなフィードバックシステムはあらゆる機械製造業にとって大変重要である。生産作業の進捗状況を把握することが必要となるが、それには判断基準が必要で、実際の作業の進捗状況をこの判断基準と照らし合わせ、問題をフィードバックさせることが必要なのである。

工場から出ると工場の屋根に大きな太陽光パネルが設置されているのが見えた。今日、太陽光パネルは特に珍しいものではないが、太陽光エネルギーは無尽蔵のエネルギーであるのでこれを積極的に開発していくことは大変重要である。また、これ以外にも工場上部の外壁には光触媒を塗装しており、化学変化により塵が屋根に付着しないように工夫していた。これは素晴らしいアイデアで、限られた空間と資源を生かし生産による環境への悪影響を低減させているのである。

日本の工場は工場近隣の住民と良好な関係を築いており、一緒に話し合ったり問題の解決に取り組んだりしている。トヨタも例外ではなく地域住民と植樹などの活動を行っている。一方、中国の状況は日本とは正反対で、企業は企業利益のみを追求し、地元政府は政治的な得点稼ぎに躍起になっており、環境や住民の健康問題などそっちのけで

危険な施設や工場を居住区の近くに建設している。企業、政府と住民の間の軋轢は深まるばかりで社会問題に発展し、多くの人が反対デモに参加し、人々の政府に対する信頼は低くなるばかりで、社会の安定を図ることが益々難しくなっているのが今の中国の現状である。幸いなことに中国も少しずつ今の発展モデルは長続きしないことに気付き始め、そして人を基本とした理念を掲げ、持続可能な科学的発展観を推し進めている。中国の企業も日本の企業に習い、人の力を信じ、地域住民と一丸となって問題解決に取り組んで欲しいと思う。そうしてこそ事業も着実に推し進めていくことができると思う。

夜は学生間の親睦を深める懇親会が開かれ、様々な余興が披露され、互いにお酒も酌み交わした。そのあと湯元温泉(天成園)で温泉に入った。本当に癒され血行も良くなったが、今はもう眠たくて仕方がない。

明日が楽しみだ！それでは、お休みなさい。

日 付：11月28日（水）4日目

大学名：中央民族大学

氏 名：郭磊

今日はとてもいい一日だった。ホテルで朝食のビュッフェを済ませた後、私達は日本最大の企業―トヨタ自動車の堤工場とトヨタ記念館に向かった。ここでは先進国日本を支える進んだ科学技術を目の当たりにすることができた。

トヨタ堤工場に到着するとまずガイドさんがトヨタの環境保全への取り組みについてお話し下さった。この数日の間にも日本人全体の環境意識の高さを強く感じた。子供から老人まで常に環境に配慮しているようだ。しかし中国では環境問題に関心を持っているのは主に若い世代に限られ、全体的に環境への意識はまだ低いと言える。トヨタ自動車を一大企業に育て上げたのは、何といってもその技術力に他ならない。自動車ができるまでの全生産過程を見学したが、車の金型プレスからはんだ付け、組み立てに至るそこかしこにトヨタの進んだ技術を見て取ることができた。ロボットが正確にはんだ付けをしており、その自動化率はなんと95%で本当に感心せざるを得ない。しかもロボットが行うのは単一作業ばかりではなく、生産車種によって違う作業を行っているのである。どのようにしてそれが実現可能なのか私にはさっぱり分からないが、異なる車種ごとの作業内容全てをロボットにプログラミングして制御しているのだろうか。本当に驚きだ。また、工場を出ると魚が水中をスイスイ泳いでいるのが目に入った。私達はてっきり工場の環境を快適にする一環で魚を飼っているのかと思ったが、なんとその水は生産過程で出た排水を浄化したものを使っているというのだ。

トヨタ記念館は堤工場よりも更に興味深く、各種完成車や楽器を演奏できるロボット等、至る所に科学技術の息吹を感じることができた。ここではトヨタの中国事業の歩みと中国での経営理念について聞くことができた。トヨタは「In China, for China」を掲げており、利益を追求するだけでなく、国内そして海外に置いても自分の為ではなく、人の為をモットーに事業を展開しているとのことだ。トヨタ自動車の環境保全助成金や中国での自動車生産が中国の科学技術や経済の発展に貢献していることを強く感じた。中国の日系企業はトヨタ自動車だけではない。中国の経済発展は日本なしでは不可能であり、日本企業の経営理念は中国の人々の考え方にも大きく影響していくことだろう。日本企業から学ぶ所は沢山ある。

とうとうずっと楽しみにしていた温泉に入る時が来た。箱根の山あいにある温泉宿に到着した時には、外はもう暗くなっていたが、みな興奮を隠しきれず、部屋に荷物を置くとすぐにタオルなどを持って温泉へ向かった。私も温泉は初めてである。暖かいお湯の中につかると立ち上がる湯煙の後ろに丸い月が顔を出しているのが見えた。その瞬間、日本人は本当に幸せだなと感じた。日本人は長生きで100歳を超える老人も沢山いると聞く。きっと温泉も長生きの秘訣の一つなのだろう。

夜の懇親会とはとても盛り上がり、食事をしながら、歌を歌ったり学校ごとの余興を披露したりと本当に楽しいひと時だった。改めて私達にこのような機会を与えて下さった全ての方々への感謝の気持ちが湧いてきた。ハードスケジュールの一日が終わりようとしている。今日の素晴らしい一日をいい夢で締めくくることが出来ればいいと思う。

日 付：11月28日（水）4日目

大学名：外交学院

氏 名：馬瀟華

「どこにも必ず道が開ける、道ある所にトヨタ車あり」と言いますが、遂に待ちに待ったトヨタ自動車見学の日がやって来た。

解説をして下さったのは来日して20年以上もたつ中国出身の女性である。この数日、多くの日中間を行き来する方々にお会いすることができ、「一衣帯水」「日中両国の古くからの付き合い」の意味を改めて強く感じる事ができた。

私はこれまで工場の生産ラインといえば大きな機械が沢山あり、その中で作業員が忙しそうに働いているという、いわばチャップリンの「モダン・タイムス」の場面のようなものを想像していたのだが、実際に工場に入ってみると最終検査の工程で3、4人の作業員が働いている以外、他の工程ではほとんど人を見かけることはなく、その代わりラインの両側では沢山のロボットが一生懸命作業をしていた。ロボットは私が想像していたように大きなものではなく、コンパクトで小回りが利くものだった。大卒ができて上がったばかりの車が運ばれて来て停止した途端、数台のロボットが車の下に潜り込んだり、車の中に入ったりしてはんだ付けの作業をしていた。一瞬で定位置につき作業に取り掛かり、まるでF1レースのガソリン給油やタイヤ交換の場面のようなようだった。作業を完成させたロボットはアームを収納し、元の位置に戻り緑のランプを点灯させて待機している。その様子がとても可愛らしかった。

一つの生産ラインでも異なる車種を製造しており、サンルーフがあるタイプ、ないタイプと車種も様々だが、ロボットははんだ付けの位置や数を自分で判断できるのだろうか。解説の方によるとトヨタはお客様のニーズに答えるため、生産ラインの車種、カラー、仕様等を注文順に設定し、ロボットは自分で車種を判断し何処を何カ所はんだ付けすればいいのか分かっているとのこと。ロボットがこんなに賢いなんて思いもよらなかった。

午後は新幹線に乗って温泉のメッカ箱根へ向かった。前回乗車したのは夜だったので外は真っ暗で何も見えなかったが、ラッキーなことに今日は雲一つなく晴れ渡っていたので、遠くに富士山を望むことができた。雲の中に浮かび上がった富士山は一際美しく、沢山写真を撮った。中国に帰ったら家族に見せたいと思う。

日 付：11月29日（木）5日目

大学名：北京理工大学

氏 名：劉滄洋

今日は訪日5日目である。名残惜しい気持ちで箱根の温泉を後にした私達は横浜へ向かい日揮を見学し、続いてまた東京に戻り丸紅総合商社を見学した。夜は東京の街へ繰り出し、日本を肌で感じる事ができた。

昨日、箱根の温泉旅館に到着したのは夜だったので、私達は今朝初めて箱根の美しい景色を拝むことができた。そこには紅葉で色づいた山々、澄み渡った青い空、静かで長閑な景色が広がっていた。

今日見学した日揮の前身は日本揮発油で、そこから徐々にEPC業務をメインとする会社へと成長したとのこと。EPCとはEngineering, Procurement, constructionを指す。同社は大型プラント、プロジェクトの請負により利益を得ている。まず初めに日揮の業務内容を聞き、それからいくつかのグループに分かれて私達が考えた架空のプロジェクトについて日揮の社員の方々と1時間程の話し合いを行った。私達のグループのテーマは総合発電所の建設である。クリーンな新エネルギーを利用し、発展の遅れている沿岸地域における総合発電所の建設を推し進め、地域間の格差を是正し、また世界のエネルギー産業をリードし、よりクリーンなエネルギーの利用を目指すというプランである。他のチームも自分達のプランについて話し合いを進めていた。その後、昼食は日揮の社員の方々とご一緒し、日本社会に対する理解をより深めることができた。

丸紅を見学する前に訪れた皇居はとても美しかった。丸紅は総合商社である。しかしこれまで私は総合商社とはどういった会社なのかよく分からなかったが、丸紅の社員の方が丁寧に説明して下さいのおかげで、総合商社とはただの貿易会社ではなく、上流、下流のサプライチェーンを抱えており、サプライチェーンを広げることに利益を更に拡

大することが可能であると知った。また、丸紅にはきちんとした価値評価システムがあり、各投資プロジェクトを慎重に評価した上で実際の投資を進めている。丸紅の社員の方とお話する中で丸紅は中国のプロジェクトも沢山抱えており、中国の事業に大変関心を持っていることを知った。これらは全て日中の良好な友好関係に支えられているのだと思った。

夜はホテルの周辺を散策し、日本のお土産をたくさん買った。また多くの店で中国人を見かけた。残念なことに途中で雨に降られ、早々とホテルに引き返すことになった。

また明日が楽しみだ。

日 付：11月29日（木）5日目

大学名：北京師範大学

氏 名：林秋文

遂に丸紅総合商社見学の日がやって来た。丸紅は投資、貿易事業に従事する日本最大の総合商社の一つである。部門が多く、業務は多岐にわたるが、柔軟な経営を行っており、その収益の高さには驚かされた。私が最も感心したのは「リスク資産」という考え方である。発生するであろう損失を事前に想定し、資金準備を進めたり、プロジェクトの内容を調整したりして、プロジェクトの継続か中止かを判断するというものである。中国の企業もこの考え方を取り入れるべきだと思う。また、「バリューチェーン戦略」からも丸紅の知恵を感じることができた。丸紅は製品の原料、加工、販売の全プロセスに目を向け、各プロセスを慎重に見極めることで最大限の利益を出しているのである。

夜の懇親会の席ではこれからホームステイでお世話になる吉永利幸さんとお会いした。とても優しい中年の男性で、中国語はできないが、私の拙い片言の日本語でなんとかコミュニケーションを図ることができた。ホームステイが楽しみになったが、同時に自分の日本語のレベルは自分が思っていた程高くはなく、これからもっとしっかり勉強する必要があると感じた。また、法務部の方とお話する中で、今後の自分の目指す方向が見えてきた気がした。日本語と法律、語学と法務の両方の知識を身につけた「法律顧問」は会社の中でもなくてはならない存在である。私も日本語と法律の知識を身につけ、この方向へ進んでいこうと決意を新たにした。

また午前中は日揮を見学した。日揮はもともとケミカル企業から成長してきた企業であり、この間、環境保全、技術革新等の面で様々な努力を重ねて来たのである。日揮がこれまで積み上げて来た知見を今後の日中協力の中にも生かしてくれればと思う。

また今日一日の中で行った一番突拍子もない事といえば、東京の道のど真ん中で短い青信号の間に国会議事堂をバックに写真を撮ったことだ。

日 付：11月29日（木）5日目

大学名：北京化工大学

氏 名：廖冬芳

今日は6時に起床、同室の友人と共にもう一度温泉に浸かり、日本式の生活を堪能した。

朝食後、箱根から横浜に出発、日揮株式会社を訪問した。日揮は主に石油化学工業産業を手掛けるほか、石油化学工業産業以外の医薬、環境保護等と言った分野にも若干関わりがあるとのこと。社員の方から会社の概況の説明を受けた後、チーム・ディスカッションによりプロジェクトを決定――、即ち日揮が中国と協力できるプロジェクトについて話し合い、4つのプランを提出した。一目見て選択できない場合、各プロジェクトのいくつかの面における点数評価を出すことにより優劣を比較・決定する。聞いたところでは、日揮ではよくそういう方法により対象を選ぶそうである。その後、昼食の時に日揮の社員の方々と交流をした。あまり日本語が得意ではないことをいうと、日揮の社員の方は「それなら日本語、英語、中国語を混ぜて交流しましょう。」と言ってくれた。この時、言語というのはあくまでも交流の

道具でしかなく、相手の母国語に長けていなくても、多面的な方法で交流することができるということを認識できた。たとえば筆談することもできる。(双方の文化に)漢字があるのだから。

交流を通して、両国の人々の日中関係の正常化に対する願いが共に強いこと、日中双方が共に努力して初めて隣国との友情を作り出すことができることを学んだ。

午後は丸紅を訪問した。会社では、PPTと映像により会社の概況の説明があった。丸紅は総合商社として貿易活動に従事するだけでなく、投資業務も展開している。丸紅は日本、ひいては世界的にも有名な企業である。これもその「正新和」の理念と切っても切り離せない関係にあるのだろう。

その後、夕食を取りながら、社員の方々と交流をした。社員の方々は皆、中国人の方を手配してくださり、詳しく質問に答えていただいた。そのためよりよく丸紅のことを知ることができた。

東京の夜は美しかった。今日は東京で、自分の眼で東京という都市の近代化、先進性を実感することができた。

日 付：11月30日（金）6日目

大学名：北京化工大学

氏 名：陶羽

今日参観した企業は、東京千代田区にある三井住友銀行本社である。

三井住友銀行は、元のさくら銀行と住友銀行が2002年に合併して成立し、今では100兆円の総資産を抱える日本第二の大銀行である。

会社の説明会では、第二次世界大戦後の経済復興期の経験や、苦しい経済危機を乗り越えた事、外資系銀行の圧力の下、再編合併の道を選び、ついに日本三大金融グループに躍り出るまでの長い道程について聞いた。

「Business is people」。当時の住友銀行の会社理念について、私は今でもはっきりと覚えている。人材こそが企業の核心であり、企業の各代の奮闘の歴史は、創造力にあふれた真面目な各代の社員無くして語ることはできないのである。

人材の重視こそが、企業が発展をつづけ、成功するための鍵である。

三井住友の社員の方々と共に昼食を取った後、三鷹の森美術館にやってきた。ここは、宮崎駿作品を主体とした美術館である。そこには多くの見慣れた場面、一枚一枚の懐かしいシーンがあり、幼い頃の思い出を呼び起こしてくれた。

宮崎駿作品は世界的にも有名であり、日本アニメの代表の一つである。

アニメ・漫画の故郷ともいえる日本のこの文化は、世界各地の多くの旅行客が日本を訪れる動機の一つといえる。

ここまで書いて、先日新幹線の中で見た一幕を思い出した。髪も白くなったおじいさんが、両手にマンガ本を抱え、若者と同じように楽しそうに見入っていた。日本のアニメ・漫画文化が、さまざまな年代の人に浸透していることがわかった。

旅の最後に、秋葉原のショッピングセンターに買い物に行った。

それはショッピング好きの私にとっては、常に辛くまた楽しいものである。

福沢諭吉(一万円)と夏目漱石(千円)どんどん自分から離れ、小銭入れが少しずつ膨らんでいくのを目の当たりにし、ああ、また生活費を節約しなければ、と心に思った。

日 付：11月30日（金）6日目

大学名：外交学院

氏 名：唐思南

宮崎駿の美術館を参観し、建造者のアニメの原シーン、原人物の再現力に感激した。

宮崎駿アニメが一番好きな理由は、その素朴さや懐かしさ、また特に深さを強調はしないが、何度も考えさせられる点にある。何か壮大なシーンで震撼させるのではなく、平淡な表現、言葉に出さない感情の中、それぞれの瞬間により、私たちの心に訴えかけるのである。

宮崎駿はヨーロッパの早朝の街角を散策するのが好きで、光と影の変化を見ながらそれらを一枚一枚の絵の中に記録し、最終的にはそれらすべてを美術館として完成させたのだそうだ。

美術館内に特に決まった路線図はなく、解説用テープや解説員もなく、それぞれが自分の心の赴くままに探検することができる。このアニメのシーンに入り込んだような美術館の中では、宮崎駿のもつ童心を詳しく見て取ることができる。例えば一階の階段のそばにある高さ1メートルに満たない小さな部屋の入口にある絵、壁の中にはめ込まれた三葉虫、タツノオトシゴの古い化石、庭の中のヨーロッパ風の水飲み場などを見れば、それを感じることができる。

まさに童話の世界が、待っているのである。

日 付：11月30日（金）6日目

大学名：外交学院

氏 名：王希晨

今朝は三井住友銀行に行った。銀行、金融に興味を持っている人が多く、皆興味津々であった。また皆にとつての三井住友銀行も一目置かれる存在だったので、銀行内部の運営体制に関する討論が、皆の話題の中心となった。

三井住友銀行に関する討論では、銀行の発展にとって「信用」が非常に重要だという点に、皆が同様に気付かされた。そのように重要な「信用」は、銀行業の発展においてだけではなく、すべての企業と国の発展に必要なもので、その重要性は言うまでもない。

午後は非常に楽しく過ごした。というのは、宮崎駿のテーマパークに遊びに行ったからである。一気に視野が広がる思いだった。色とりどりのアート要素が次から次へと目に飛び込み、皆称賛しきりだった。日本のアニメや漫画プロダクションは、世界で唯一無二の地位を築いていると言っていいだろう。まさにこのようなアニメや漫画の巨匠輩出により、日本のアニメ・漫画界の地位があるのだ。

夕食は本当においしかった。おやすみなさい。

日 付：12月1日（土）7日目

大学名：北京大学

氏 名：李溪月

今日はHome-stayが始まる日である。皆興奮を抑えられない様子だ。待ち切れずに会議室に座りつつも手に持ったお茶を一口も飲む余裕もなく、覚えてたの日本語を慌ただしく復習するかと思えば、自分のhost family の様子を思い浮かべてあちこちろついたり、皆がまるで幼稚園に入ったばかりの幼い子供のようにだった。同級生がやさしそうな日本人のおじいさんおばあさんに引き取られ、または可愛らしい子供たちに連れられる様子を目の当たりにし、残された皆は焦り始めていた。多くの耳が大きくそばだてられ、渡辺さんの読み上げる名前に聞き入る。「一家歡喜几家愁」（一人の喜びは、皆の憂鬱）とはまさにこのことである！

ついに私のホストである矢野洋平さんが迎えに来てくれる時がやってきた。会議室にはもう何人も残っていない。洋平さんと奥さんが共に三十二歳と、とても若いことを事前に知っていたが、オレンジ色のカシミアのマフラーをかけ、ベージュ色のジャケットとカーキ色のカジュアルなパンツを身に着けた渋い髭をたくわえたカッコいいお兄さんが入口から現れた時、「すごくハンサム！」、「なんて格好いいの～～」、「わあ、私のホストもあんなにかっこよかったらいいのに！」という声が皆から上がった。私たちが手続きを終え、出ていく時でもまだ背後から少しずつ小さくなっていくどよめきの声が聞こえていた。

矢野さんは道すがら、とてもシャイな様子だった。中国語はあまり流暢ではなかったが、一生懸命私と交流しようとしていると感じ取ることができた。ちょうど私が英語を話す場合もとても緊張するのと同じことである。そうして互いに目が合っては微笑み合い、自然とうち溶けることができた。私たちの行先は小江戸川越市である。そこには江戸時代の東京の伝統的な風情のある古い街並み―蔵造り街、各種商店、住宅が林立しており(多くが耐火構造の木造建築物)、菓子屋横丁などがそのままの状態で保存されている。80m余りの細長い小さな通り(綿飴、麩菓子、せんべい、みたらし団子等の伝統的な「駄菓子」を売っていた。特に矢野さんが、ご自身いわく子供の頃一番好きだったという飴を買ってくださり、2人で飴を口の中に入れポリポリ音を立てながら食べたのは、最高に楽しかった)、ならびにそのシンボリックな建築である鐘楼(後にとある芸術品店で、この鐘楼に関する日本の伝統的な版画を鑑賞した)等。

長いこと電車に乗り、大体一時間半から二時間くらいだろうか、ついに埼玉県にやってきた。間の悪いことに、私たちが駅から外に出て行こうとした瞬間、雨雲でどんよりとしていた東京の空から突然、豆粒ほどの大きな雨が降り始めた。心の中で「ああ。なんてついていないのだ」とため息をついたが、矢野さんはしばらくして傘を二本買って来てくれた。ごく普通の透明な傘だが私にはその瞬間、この傘が万華鏡のように雨の水滴も多彩な色に反射しているように思えたのである。

昼食もごく簡単に取った。一路雨の中を歩きながら、あるラーメン屋の前を通りかかり、矢野さんは私に食べてみるかと聞いてきた。それは願ってもないことだった。というのはそれまでの私たちの昼食、夕食、朝食はすべて精魂を込めて作られた「(食べ)放題」の御馳走、懐石料理、お弁当…などだった。日本のラーメンは熱々でさまざまな具が入ってとても美味しい、とずっと評判を聞いていたのに、この「庶民の味」を味わうチャンスがなかったのだ。そこで、すぐうなずいた。この「頑固(がんこラーメン)」という名のラーメン屋は、矢野さんによると大変有名であり、中には十五席しか席がないため、それ以外の人は皆、外で待っていないといけないのだそうだ。だが美味しいラーメンのため、この寒空の下で並ぶ列はどんどん長くなっていく。待っていると、矢野さんが熱いウーロン茶を一杯、注いでくれた。それを手にしていると、手が暖かくなり、心も暖かくなった。その後に食べたラーメンは、その評判に違わないものだった。普段食べる「味千拉面」やその他の日本料理店で食べるものとは異なり、「がんこ」の麺とスープ、具は、完全に分かれていた。麺はコシの強い手打ちラーメン、スープは豚肉、鶏肉、かつおぶしに昆布を長時間煮込んだもので、たまごはつるんとした歯触りだった。皆、「ずるずる」と大きな音を出して食べていた。それは先生が以前教えてくれた、音が大きいほどそのラーメンがおいしいことを現しており、店の主人が喜ぶのだ、というとおりだった。かつて本で読んだ「ラーメンから立ち込める湯気とずるずると吸い込む音」を今日、ついに身をもって体験することができたのだ、と思った。

午後のひと時は、思いもかけず、青空の下で過ごすことができた。雨上がりの川越は、汚れを洗い落した後のように澄み渡り、空気も土の淡い香りを含んでいた。矢野さんは私を連れてあちこち歩き、伝統と現実の間を何度も行き来した。通りの両側には、和菓子、日本刀、お箸、装飾物(瀬戸物、版画etc.)等の小さなお店があるのだが、木の香りを放つ小さな家、かの古色蒼然とした木のテーブル、木の椅子、木の看板、さまざまなお菓子、雑貨…これだけでも美しく、特別な、忘れ難い思い出を綴ることができる。

夕方近くに、私たちはまた電車に乗って新宿まで帰ってきた。矢野さんのお宅のあるところである。情けないことに、この数日の過密スケジュールのためだと思うのだが、帰りの電車の中では耐え切れずに手すりにもたれて眠りこけてしまい、最後に電車から降りる時、矢野さんに揺り起こしてもらったのである。その後、矢野さんはしょっちゅう、使い慣れない中国語で私に「你累吗？(疲れた?)」と聞いてくれた。マンションにつくと、Cappuccinoを一杯入れて私の目を覚まさせてくれた。本当に感謝だ。

矢野さんのお宅はあまり広くはなかった。後におしゃべりの中で、不動産価格についての話題になったが、東京エリアの不動産価格は、北京と同じように、あまりにも高くしてぞっとする。お二人のように働き始めたばかりで結婚して間もない若い人にとっては大きな出費である。夜、入浴の際、奥さんは私に何度も「ごめんなさいね。うちは狭くて」と言ってくれた。だが部屋が小さくてもインテリアには独特の風情があった。壁一面に貼られたタイルが、ほかの部分のシンブルな白と合わさり、個性的且つ爽やかで、さらに部屋のあちこちに様々な小さな工芸品が置かれている。ほとんどが矢野さんが海外でお仕事をされた時に持ち帰ったおみやげだそうだ。奥さんが後にうれしいことに、私が贈った京劇

の人形もテーブルに飾ってくれた。

それから夕食になった。矢野さんは私を歓迎するため、数人の同僚を呼び集め、ともにフランス料理のレストランに行き、食事をした。日本でフランス料理のフルコースをいただき、chefと少しフランス語を話すことができる、それは日本語も話せず、経済も好きではない私にとっては、大いにうれしいことだった。皆初対面だったが、矢野さんの同僚の方々は、自分たちだけで食事をするのではなく、話の内容をよく説明してくれ、中国や北京、私のことについて質問したり、たまに私をからかったり、大変にぎやかであった。食後は、皆で入口で記念写真も撮った。コックさんは帰り際に特に私に「Bonne fin d ' année」と言ってくれ、とても感動した。この見知らぬ国で私は孤独ではなかったのである。

一日目の夜は、あっという間に過ぎていった。入浴を済ませ、パジャマに着替えると、リビングのソファに矢野さんと奥さんの間に座り、たくさんおしゃべりをした。私は地図上の都市の名前を指し、食文化、年中行事、風俗習慣等について話をした。また私の学校、私の家、私の生活について話し、二人は終始辛抱強く、興味を持って耳を傾け、よく質問してくれた。たとえば「中国には何本くらいの鉄道があるのか」、「今でも一人っ子政策はやっているのか」、「毎日、何時間くらい勉強しないといけないのか」…。最後は私をゆっくり休ませるため、名残惜しい中、おしゃべりを打ち切り、その後温かい布団の中にもぐりこみ、眠りについたのである。

翌日は9時過ぎまで寝てしまった。奥さんの作ってくれた栄養たっぷりの朝食をいただき、大体11時くらいに共に出発し、東京の有名なSkytreeを見に行った。その後の散策、写真撮影は、特に変わった内容はなかった。それから浅草寺、雷門等を参観した。時間はあっという間に過ぎ、お別れの時間が来たとわかった時には、もう夕暮れ時近くになっていた。

私のHome-stayにはドライブ、夕日、富士山のロマンチックな場面はなく、眼下一面に広がるオーシャンビューのサプライズもなく、4階建ての別荘、ベントに誘導される豪華さもなく、ごく平凡なものだった。だが平凡であるからこそ、本当の体験であった。矢野さんと奥さんは他の一般の日本人と同じように、生活のために懸命に働き、おしゃべりしたり、笑ったり、喧嘩をしたりする。同じように友達がい、趣味があり、夢があり、中国に対してとても好奇心を持ち友好的で、さらに多くの交流と協力を望んでおり、誠実で暖かだった。

私は枕元に小さな羊のぬいぐるみを置いて眠った、あの異郷の地での安らかな感覚を永遠に忘れることはないだろう。

「吾心帰処是吾郷」(吾が心の帰する処、吾が郷なり)。感謝いたします。

—2012.12.1～2@東京、自宅にて。

日 付：12月1日（土）7日目

大学名：北京大学

氏 名：王娜

建築を比べる旅

私のホームステイ先について聞いた時はワクワクした。28歳と31歳の若いご夫婦と可愛い犬一匹というご家庭には、日本の堅苦しいしきたりや、伝統的な生活環境などはなかったが、そこには温かみのあるお宅と私に対して妹のように接してくれる親しさがあった。若いお二人ということもあり、彼らも日本の伝統的なことに興味を持っていた。そして私が都市設計を学んでいることを知ると私と過ごす2日間を細かく計画して下さり、私は現代建築と伝統建築の明確な対比を体感することができた。

スタートは現代建築からだった。ご夫婦は街の中心部にある大企業の高層ビル群に私を連れて行き1つ1つ説明して下さった。私は街を彩る公園にも目を奪われた。続いて伝統的な日本庭園を見せるためにお茶席を予約して下さっていた。庭園は和風の外装を施した日本最大のホテルの中にあり、有名な茶道庭園を縮小・復元したものだそう。茶道の先生は私たちに畳のお茶室での冬のお点前をして下さった。周りの木々は50数年の歴史があり、庭園や室内の設えはとても手の込んだもので、随所に茶道における禅が感じられた。

お昼は本格的な中華料理を頂き、皆行った事のない国分寺に向かった。到着すると、その風景にとっても驚き興奮した。広場のようなところに古い建物があるだけだと思っていたら、そこはなんと原生林の中だったのだ。

曲がりくねった小径や小さな清流、生い茂った枝葉は歴史や神聖さを感じさせた。さらに奥に進めば地産地消の農家を見かけた。自然の果物や野菜を東京で初めて目にすることができた。こうして東京の郊外にでかけたことは貴重な経験だったと思う。その後さらに20分あまり歩いたところでやっと国分寺に到着したのだった。中国の伝統建築と比べると、こちらは木の構造がそのまま保たれており、塗装や派手な装飾がない。色鮮やかな木々の緑とのコントラストが素晴らしかった。中国の伝統に日本的な風格が加わったその建物を私は旅行者としての立場を超えて堪能した。

自然を満喫した帰り道、夕食のデザートにと新鮮な柿を買って帰った。家族一緒に旅を楽しみ、美味しい夕食を頂いた。心温まる経験だった。

そして夜は可愛い犬と楽しいひと時を過ごしたこともここに書き加えたい。

日 付：12月1日（土）7日目

大学名：北京化工大学

氏 名：廖東芳

今日は心躍らせながらいち早く日中経済協会にやってきた。なぜなら今日と明日はホームステイだからだ。

私を受け入れてくださるご家庭には中国人の奥様と日本人のご主人、6歳と4歳の男の子がいた。奥様が4歳の息子さんを連れて私を迎えに来てくれた。最初その息子さんは私をあまり相手にしない様子だった。恥ずかしかったか、私のことをあまり好きではなかったのかもしれない。手を繋ごうとしても振り払われてしまった。それでも私は微笑んで「これは中国結びです」と小さなプレゼントを彼に渡した。彼がお母さんに私のことを「あの人」と話しているのが聞こえた。

お昼はお店でカレーを食べた。彼はトイレに行きたいと1人で席を立ったが、心配に思った私は一緒について行った。彼が「トイレ」と叫びながら押したドアには事務所と書かれていた。私は急いで彼の手を引きトイレに連れて行った。食べ終わると外は大雨で、傘を持っているのは私だけだった。その小さな傘にはどう見ても3人は入れないし、風も強かったので困ってしまった。私は傘のほとんどを彼にかざした。年は幼いながらも私の真心が伝わったのか、私を見上げたその視線は優しいものに変わっていた。家に着くと「ゆうき、お姉ちゃんが来た！」と大きな声で叫んでいた。とても嬉しかった。子どもに限らず、相手を思う真心があれば人と人はわかりあえると私は信じている。

ここはごく普通のご家庭だと思う。お父さんはパソコンに向かって仕事をしており、明日は中国出張だそう。午後にはお母さんと一緒にスーパーに買い物に出掛け、夕食を準備する間私は優樹ちゃんと俊樹ちゃんと遊んでいた。他の人たちのようにショッピングモールや観光に出掛けるのではなく、日本の普通の生活をリアルに体験できた。少しテンポは速かったかもしれないが心温まる、楽しい時間だ。

ゲストということで私が最初にお風呂に入ることになった。そして優樹ちゃんと俊樹くんが次に続いた。お風呂上がりの2人はすぐにパジャマに着替え「お姉ちゃん」と叫びながら私の部屋に飛び込んで来た。

今夜は彼らの可愛い声を聞きながら眠れそうだ。本当に可愛い2人。きっと明日も楽しい1日になることだろう。

日 付：12月1日（土）7日目

大学名：中央民族大学

氏 名：路輝

今日は待ちに待ったホームステイだ。滞在するお宅が神奈川県と東京から少し離れていること、ご家族に2人のお子さん（7歳と4歳）がいるとのことで、自分がちゃんと仲良くやっていけるか心配だった。日中経済協会では、興奮と緊張が入り交じった心持ちでステイ先のご家族のお迎えを待っていた。顔を合わせた当初は子どもたち特有の言葉や

彼らの質問に困ってしまい、さらに緊張してしまった。しかしお話しするうちに、堀田さん(ご主人)の奥様が中国人であること、堀田さんご自身が中国に興味を持っていることや、私たちが共に歴史好きということがわかった。そして車で小田原城に向かった。堀田さんは、日本の戦国時代の三大武将である豊臣秀吉と徳川家康の、小田原城との関わりを詳しく教えてくれた。

徐々にお子さんたちとも仲良くなってきた。夜は温泉に入った後、お宅でお好み焼きを作って食べた。日本の若者に人気の食べ物だ。みんなでビールを飲み、笑い声が絶えない時間だった。洗面所に行った後は二次会だった。堀田さんと任さんと一緒に飲みながら、彼らのこれまでのことを伺い、気がつけば夜11時を回っていた。

翌日はみんなで早起きして海辺を散歩した。話が日本経済に及ぶと、堀田さんはご自身の経験を交え90年代のバブルについて話してくれた。彼は中国経済は今急速に発展しているが、ある一定の地点を過ぎれば日本と同様に困難な状況に陥るだろうと教えてくれた。彼が当時感じた困惑を避けるためには私にも心の準備が必要なのだろう。お昼には日本の有名な国宝である大仏を観に行った。時が経つのは非常に速いもので、気がつけばお別れの時間が迫っていた。名残惜しいけれども堀田さんと任さん、可愛い2人のお子さんに手を振った。

2日間という短い期間ではあったが、中国人学生に対する日本人の心からの歓迎と、日中友好交流活動へのサポートを深く感じる事ができた。普通の日本人家庭での生活を体験し、子供教育を重視する日本人の姿勢を知った。親たちは子どもたちの時間管理なども含め、良い生活習慣や行動を身につけさせようとしていた。今の中国の「金持ちの子女」や「すねかじり」などの問題を我々も改めて考えなくてはならないだろう。徐々に社会問題化しているこうした問題は、子ども自身だけでなく家庭教育の問題として軽視できなくなっていると思う。

日 付：12月2日(日) 8日目

大学名：北京大学

氏 名：張岩

ホームステイ2日目、幸せな気持ちは続いていた。まずは日本の朝ご飯を味わった。おにぎり、ホットミルク、コーヒー、パン、サラダ、盛りだくさんだ。食べ終わるとみんなで埼玉県草加市の大通りを散歩した。大きな犬と一緒に歩きながら、田中英穂さんは草加について話してくれた。親しみを感じれば普通の街の風景や習慣が自然に思えた。

散歩を終えると稜介さんが車を運転して、私と剣吾さんを東京エリア最大のイオンショッピングモールに連れて行ってくれた。そこではコミックストア、ペットショップ、おもちゃ屋さんやCDショップなどを見てまわり、日本のモノをたくさん買い、そして大阪焼きを食べた。確かに大阪には美味しいものがたくさんありそうだ。ショッピングセンターからの帰り道、もうすぐホームステイが終わるのだと感じていた。帰宅してご家族全員と記念写真を撮り、プレゼントを贈り合った。私に贈られたプレゼントはどれも心を込めて準備してくださったもので、コナンの切手や有名人のフィギュア、幸せが詰まった美しい箱はとても印象的だった。それから5人で車に乗り込みホテルニューオータニに向かった。途中スカイツリーや浅草寺も通ったが、時間がなかったので少しだけしか見られずとても残念だった。

ホテルに到着、私は名残惜しい気持ちでいっぱいだった。英穂さんご一家とは1日あまりご一緒しただけだが、日本の家というものを味わい、剣吾さん、稜介さんとはフェイスブックを交換した。別れを惜しみながら、日本人の中国人に対する温かさ、私にしてくれたことを思い感動していた。

集合後のスケジュールは、楽しみにしていたお台場での買い物だ。100円ショップでは食べ物や小物類を沢山買ってしまった。日本の物価は高いが、100円ショップなら理想的な買い物ができる。

今日は本当に名残惜しい1日だ。英穂さん、千代子さん、ありがとう！剣吾さん、稜介さん、ありがとう！本当にお世話になりました！

日 付：12月2日(日) 8日目

大学名：北京理工大学

氏 名：李雪松

昨晚眠る前に私たちはしっかりスケジュールを立て、ぐっすり眠ることができた。目的地は、明治神宮、原宿、そして渋谷だ。東京の地下鉄はとても便利で順調に巡る事ができた。明治神宮では美しい紅葉と鏡のような池、そして幸運にも日本の伝統的な婚礼衣装に身を包んだ新郎新婦を目にすることができた。渋谷ではテレビで親しみのあった風景を眺めることができた。

ホテルでお別れした後、私はこの2日間がとても速く過ぎてしまったと感じた。楽しさと温かい家庭の雰囲気がそう思わせたのかもしれない。だから私をご家族の話をまったく理解しなかったとしても、皆さんの変わらぬ温かさが、ホテルの部屋に戻った後の寂しさを際立たせたのだろう。お別れの時、この2日間があまり充実した内容ではなかったとしきりに私に謝っていたが、私はちっともそうは思わなかった。ご家族皆さんの歓迎を受け、私は日本の家庭というものを心から味わうことができたのだ。

実のところ今日のスケジュールが一番リラックスできる、純粋な観光だった。3名の現地ガイドも一緒だ。観光ルートにあまり詳しくない3人は、本当の家族の一員のように私に接した。知り合ってから数十時間も経っていない私たちは特殊なご縁で他人から友達になった。とても不思議だし面白い。私は今回のホームステイを決して忘れないだろう。平井さんの連絡先も頂いたことだし、今後も交流を続けていつか3人が中国に来ることを願っている。何度も口にした言葉だが、最後に伝えたいのはやはり「ありがとう！」だ。

お台場に向かう途中、学生たちは皆自分のホームステイについて話した。皆様々な経験をしていた。富士山へ行った人もいれば、都内各所を観光した人もいた。またご家族と一緒にスポーツをしたという人もいた。どれも得難い経験だ。

お台場の夜景は素晴らしかった。でも私は心の中で過ぎ去った数十時間を想っていた。本当に忘れられない時間だった。

日 付：12月2日（日）8日目

大学名：北京理工大学

氏 名：陳孫傑

日本に来て8日目、ホームステイも終わった。短い8日間ではあるが、本当にたくさんのことを経験した。ここ数日、時が過ぎるのを速く感じた時は楽しくて時間が飛んで行ってしまうようだったし、遅く感じたことがあったのは思い返した時にはそのことがずいぶん前のことに思えたからだろう。しかしどの日も非常に楽しく過ごしたのは確かだ。

ホームステイ2日目、目を覚ますとホストファミリーの5歳になる娘さんがいた。昨日と同じように彼女とじゃれながら過ごした。言葉の壁はあるが私たちは仲がとても良かった。だっこをせがんだり、木登りしながら私によじ上ってくる彼女はとても可愛かった。彼女を見ていると、人と人之间には言葉を超越した感情があり、文字による表現は必要ないのではと感じた。国や人種の差、そして利害のない関係、これこそ人類が努力すべきことだと思う。

朝食を簡単に済ませた後、ホストファミリーと一緒におしゃべりをした。話題はとりとめのものだった。そして銀座に出掛けた。銀座は王府井に似ていると感じた。記念品を急いで選び、お昼を食べてホテルニューオータニに行った。

ホームステイはとても平凡で、素朴そのものだった。正直なところゆっくり休んだ2日間だった。しかし私はホストファミリーの、多くのモノや力を注いで特別なことをしようとするのではない、その落ち着いたところに感動していた。彼らには互いに支え合える温かい家があり、笑い合える家族がいて、一緒に祝うことがある。その平凡で静かな生活があれば十分なのだと私は思った。

夜私たちはお台場に行った。ゴミを埋め立ててできた島に感銘を受け、日本の環境分野での努力に驚いた。中国国内の環境についても考えなければならぬと感じた。そしてお台場での買い物時間はなんといっても楽しかった。

残りの日程も非常に楽しみである。せっかくの機会だから日本の多くのことを見て行きたいと思う。

日 付：12月2日（日）8日目

大学名：北京師範大学

氏 名：白晧

今日は朝早く起き、おなじみのピンク色の部屋を見て親近感が倍増した。お母さんは親しげに私にあいさつし、早起きに感心したと言った。朝食はお母さん手作りのおにぎりだった。食べる時、昨晚お母さんに何を食べたいか尋ねられ、「おにぎり」と答えたので朝食に出してくれたことに突然思い当たり、その瞬間とても感動した。お母さんはわざわざ食後のデザートプリンも用意してくれた。

昼、お父さんとお母さんと未佳は東京名物のもんじゃ焼きを食べに連れて行ってくれた。行先はもんじゃ焼きで最も有名な月島だった。お父さんは嬉しそうに私と未佳の写真を撮ってくれた。最初にもんじゃ焼きを自分で焼いた時は緊張したが、何とか成功し、とてもおいしかった。食べ終わった後、時間の余裕がなかったので、みんなで急いでニューオータニに戻り、ついに別れの時を迎えた。お母さんはとても名残惜しそうだった。たった2日だけだったので、親しくなってしまう。だが、まだいい。3カ月後の来年2月、未佳が北京師範大学に来るので、また一緒に勉強し、おしゃべりできる。それから来年の夏、お父さんとお母さんが北京に来る時、中国語でおしゃべりしようと約束した。

スケジュールは慌ただしく、ニューオータニに戻って10分も経たないうちに、私たち一行はお台場に向かった。お台場の思い出は、もちろんフジテレビの丸い展望台だ。時間の関係で上まで行かなかったが、十分楽しかった。フジテレビ1階のホールに行き、ワンピースの宣伝パネルを見て感動した。やはり国民的アニメである。劇場版が出ると全国で宣伝するので、子供達も喜ぶ。フジテレビが見られ、お台場の旅は行った甲斐があった。その後ブラブラ歩いて、海浜公園へ行ったが、巨大な観覧車のロマンティックな雰囲気寒さを忘れた。カップル達が観覧車を並んで待つ様子を見て、心から彼らを祝福した。

それからアクアシティお台場で伝説の100円ショップを見た。食品を除き、大部分の物が中国製で、非常に感慨を覚えた。私たちが望むのはクリエイティブ・イン・チャイナ、中国独自ブランドであるべきで、中国の資源を利用し大規模に世界のその他のブランドを作るということではない。

今日も収穫の多い一日だった。私は日本の家庭の一日、日常生活を理解し、中国がいかに世界へ出て行くことができるか再び考えた。大学生は素晴らしい、やはり大学生は素晴らしいと思う。自分の頭を使って行動することができる。この中国のため何かしよう、一緒にがんばろう。第11回訪日団のみんな！

日 付：12月3日（月）9日目

大学名：北京大学

氏 名：李溪月

今日のスケジュールは、「色とりどりで美しい」以外、他に説明する言葉はない。第1の目的地は東京都中央清掃工場だったが、みんなが想像するような「素敵な」場所ではないかもしれない。なぜならゴミ捨て場と聞いて、大部分の人、特にゴミの分別、回収、再利用がまだあまり普及していない中国では、その第一印象は臭気がただよい、地面は汚い粘液だらけで、あちこちにハエが飛び回るといった光景で、すぐ無意識に鼻をつまみ、頭を振りながら嫌な表情を浮かべるだろう。だが今回の「ゴミの山に勇敢に乗り込む」旅で、ゴミに対して以前とは異なる認識を持つようになった。おそらく、「少しもいい所がない」のではないのだ。

東京都中央清掃工場の外観はかなりおしゃれで、ガラス素材で作った外壁が太陽の下でまぶしく輝き、高い煙突が傍らにそびえていた。煙突は三角柱の形である！周囲は植物のカーペット、路面には汚れもなく、空気も十分きれいで、乱れ飛ぶ焼却灰や鼻を刺す臭い等は全くない。工場内部に入ると、中は快適なベージュ色で統一され、シン

ブル、爽やかで堅苦しくない。全ての処理過程は生物解剖図のように明らかで、火格子、触媒反応塔、ゴミ回収車の画像など、あるべき物は全てある。説明の中で私は“Harmony with the local and community (地域とコミュニティとの調和)”という点に特に注目した。周囲の建物には居住区も多く、商業ビル等もあり、この工場が人や環境との調和やバランスを維持するのに多大な心血を注いでいるのが見て取れた！

昼の昼食は非常に高級だった。2008年5月6日に福田康夫元首相が10年ぶりに日本を訪問した胡主席を招待した場所——かつて梅屋庄吉が孫文を招待した場所でもある——松本楼である。日比谷公園内に一棟の素朴な小さい洋館が草木のうっそうと茂った中に隠れているのだ。灰色をベースにしたシンプルな西洋風デザインを見て、私は思わず故郷にある民国時代の小さい建物を思い出した。孫文とこの建物と梅屋庄吉の親交の縁を理解したからかもしれないが、それでもここには一種の風格、一種の革命精神、尊い日中友好の証があると私は強く信じる。

ごちそうを食べ、次に家に帰った。

在日本中国大使館で韓公使から熱烈な歓迎を受け、私たちはこの9日間に見聞きし、感じたことを積極的に報告した。中国の青年世代として、私たちは逃れられない、また当然担うべき民族の責任を担っている。まるで100年前に梁啓超が言った「少年強則国強、少年富則国富、少年自由則国自由、少年勝于欧州則国勝于欧州、少年雄于地球則国雄于地球！（青年は祖国の未来・希望であり、より努力し祖国の発展に貢献しなければならないの意）」のとおりである。私たち中国の青年は国外に出て外の世界を見るべきだが、戻ること、家に戻ることを忘れるべきではない。

「君が公明正大であれば、国は暗くならない」私はついに6年間暗唱した校訓「中国魂と世界の度量を持つ南外人（南京外国語学校人）になれ」の本当の意味を理解した。今こそ、私たちがそのように勇敢に責任を担い、探求し、前進の歩を進める中国人になるのだ！

Tomorrow will be better (明日はもっとよくなる)

@Hotel New Otani. (2012.12.3)

日 付：12月3日（月）9日目

大学名：北京化工大学

氏 名：陳露

今日は東京都中央清掃工場を見学した。この工場には3つの特徴があるが、最も印象深かったのはその3つ目だ。まず3つの特徴を挙げる。1に充実した公害防止対策、2に近隣の建物との調和、3に資源エネルギーの循環利用である。この清掃工場には火格子焼却炉が2台あり、それぞれ1日当たり300トンのゴミ処理が可能で、更に1万5000キロワットの発電ができ、この工場自身の電力需要にあて、余りを電力会社に売り周辺住民に供給している。中央清掃工場には太陽光エネルギー輸送システムと太陽エネルギー発電システムがあり、工場では焼却灰の熔融処理により床材（室外）を作ったり、廃ガラスを使用しガラススタイル（室内）を作ったり、古紙を使用し壁用石膏ボードを作ったりしているが、もちろんメインは焼却熱の利用である。このような工場にいと、頭からつま先まで、中から外まで、工場内の全てが「ゴミが宝になる」を実践していると感じられる。遠くない将来、このような環境保護技術と持続可能かつ長期使用という価値観が人々の生活の各方面に応用されることを願っている。

昼は日比谷の松本楼で西洋料理を食べた。松本楼は孫文と梅屋庄吉の友情、孫文と宋慶齡の愛情の証人だ。梅屋庄吉と孫文は共に「アジアを強大に」という考えを持っており、意気投合した。かつて梅屋庄吉は「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて君を支援す」と言ったが、彼の孫文への支援は武器、飛行機に止まらず、感情の交流もあり、彼の両親は孫文を自分の子のように接した。孫文の死後はその業績を広く伝え日中友好を促進するため、梅屋庄吉は孫文の銅像を4体铸造した。さらに孫文と日本のゆかりを映画に撮影するつもりだったが、惜しくもその頃日中関係が悪化した。現在の日中関係も微妙な段階にあるが、一衣帯水の近隣であり、日中友好は代々続く信じている。

その後、私たちは非常に興奮して「帰宅」した。在日本中国大使館で、みんなは話したいことを存分に話し、感想を語り合った。こんなに近距離でこんなに深く日本の庶民の生活や文化や習慣を体験し、日本の工場や企業を訪れ、

全面的にこの隣人を理解する機会を持つことができ、私たちは非常に幸運だと思う。だから私たちには自分たちが見た真実の日本を身近な人に客観的に話し、自国人に進んだシステムを学ばせ理性的な愛国を促進させる責任がある。もちろん、経済科学技術においても社会文化面においても、日本には学ぶべき所が多くある。進んだ物を学んだら、技術を持ち帰り、私たちの国を強くしよう！

日 付：12月3日 (月) 9日目

大学名：中央民族大学

氏 名：朝娃

2日間のホームステイも終わり、私たちの今回の訪日活動も終わりに近づいた。あと2日で私たちは日本を離れる。最後のいくつかの視察訪問はより熱意を持って真面目な態度で向き合わねばならない。

まず見学に行ったのは中央清掃工場だ。この工場のゴミ処理燃焼方式は全連続燃焼式火格子焼却炉で、その燃焼能力は1日当たり600トン(焼却炉2基、1基当たり1日300トン)である。この工場の敷地面積は約2万9000平方メートルで、日立造船、前田、日本国土建設が共同で設計・施行し、高さは地上31.7メートル、地下14.2メートル、煙突の高さは約177.5メートルだ。印象深かったことが2つある。第1に燃焼後に発生するスラグの有効的な再利用である。焼却灰を1200度以上の高温で溶かした後に急速冷却すると、砂状のスラグになる。その容積は灰のわずかに2分の1だ。溶融スラグになると、灰の中のダイオキシン類が分解され、重金属を封じ込めることができるため、安全で有効な建築資材として利用できる。第2に燃焼後に発生する熱エネルギーの有効利用で、主に発電と熱供給に応用しており、発生する電力と熱エネルギー等は施設内で清掃工場の稼働に利用され、電力と燃焼費のコストを削減している。また電力の一部は電力工場に販売している。このようにしてすぐれた循環型工場となり、資源有効利用という目的を達成している。

最も収穫があったのは在日本中国大使館の訪問だ。日本ではここが私たちの家で、韓志強公使や程団長と共に皆が思い思いに話をした。おしゃべりの中で、全員が自分の感想を話した。

日本では書道や中国製の商品、中国料理など、あちこちで中国の要素が見られ、それを見ると中国人は自信と活力を強める。ある参加者の言葉が適切だった。それはこの自信と活力があつて、私たちは「中国」という列車に乗ることができるのである。訪問時、私たちは日本にはあつて中国にはない細部を発見できたが、これらの細部のデザインとサービスは最終的に人間のために作られ、「人間が中心」「ヒューマニゼーション」を体現していた。また日本人との付き合いを通じ、彼らの親切心、厳しさ、暖かさ、周到さに気づき、日本の声を真に感じた。

韓公使の素晴らしいスピーチから、私たちは色々な事をわかりやすく学んだが、実は大使館の業務はとても大変で、また複雑、困難、敏感という特徴を持っている。私たち中国人、特に若い世代は私たちの隣国をより客観的、全面的に理解すべきである。「こちらか、あちらか」、「白か黒か」だけではない。日本も中国の発展を正確に認識すべきで、両国関係の複雑な局面においては平和共存のみが正確な選択である。

日 付：12月4日 (火) 10日目

大学名：北京大学

氏 名：鄧思圓

今日のスケジュールは午前中がキューピー工場、午後が慶応義塾大学の見学である。

キューピー工場はドレッシングとマヨネーズの生産を主とする食品工場だ。ドレッシングの原料の大部分は卵であるため、キューピー工場では卵関連の産業にも手を広げている。ドレッシングとマヨネーズの主な原料は卵黄だが、同社は原料を十分に活用するため、卵白、卵黄、卵殻膜、卵殻を分離した後、卵白は卵白を主な原料とするクリームケーキ工場に売却し、卵殻膜で化粧品を製造している。また卵殻は主にカルシウム強化剤の製造に使用する他、塗り壁材の製造に使用している。塗り壁は空気中の有害物質を取り除く機能があり、リサイクル処理が容易である。

特に印象深かったのは割卵機だ。割卵機の作業効率が1分間に600個という高速であるため、割卵の過程は見えないほど速く、一つ一つの卵黄がピンポン玉のように受卵器に飛び込む様子しか見えない。近くにいた作業者が正常に処理されなかった卵を素早く見つけて取り出す様子を見て、その場にいた参加者たちは非常に驚いた。私達に解説してくれた従業員も以前そこで作業したことがあるが、長時間作業すると気落ちすると話していた。また清潔を保つため、割卵機は2時間毎に停止して洗浄する。

次の女性解説員はマヨネーズの包装の変遷を説明してくれた。新鮮さを長く保つため、マヨネーズボトルは何層もの異なる材質で形成されている。ただの薄いボトルの層に見えるが、実は奥が深い。日本企業は取り組みがきめ細かく、驚かされる。また高齢者にも子供にも食べやすくするため、同社は元々プルリングだった中栓を反対方向にひねればすぐ開けられる中栓デザインに変えた。顧客がボトルのフィルム包装を外す時に説明書きも一緒に外れないようにするため、元々は垂直だった開け口を斜めに変え、また左利きの人にも便利のように考慮して、左と右それぞれに向かって開け口をつけた。このように顧客へサービスする態度は、ボトルデザインに表れているだけでなく、キューピー生産の全ての部分に表れている。キューピーだけがこのような理念を持っているわけではなく、日本企業全体が同様なのだ。顧客が思いつかないことはあっても、会社にはできないことはない。この言葉はここ数日何度も言われているが、日本人の厳しく、まじめで、こまやかな勤務態度と目につかない細部への努力は非常に驚くべきものだ。

昼食時にはキューピーの様々なドレッシングを試食したが、確かにとてもおいしい。ある女性のドレッシング混ぜご飯を見て、キューピーの従業員が驚いた。見学の最後に、全員が自分の写真を貼ってあるマヨネーズももらった。

午後は日本の著名な慶応義塾大学を訪問した。慶応大学は経済学部が有名で、日本の光華管理学院と言われている。

自由討論の際、驚くことに各グループの討論テーマが一致していた。どれも就職を巡り展開したのだ。日本では卒業予定の大学生は通常大学3年生の時に就職活動を開始し、順調であれば大学4年生になる前にオファーを手にする。研究を続ける人は学術関係の仕事に従事することが多い。それに対し中国の大学生が研究継続を選ぶのは、一般的に本科生が満足できる仕事を見つけるのが難しいためであって、就職せざるを得ない学生は通常、大学4年生になってから準備を開始する。日本企業は卒業予定者を採用しOJTを行う傾向があるが、中国企業の研修の仕組みは不健全なため、研究能力がより優れている修士卒業者や博士卒業者を採用する傾向がある。しかし私の認識では職業能力は大学ではなく企業が育てるべきである。職業技能ではなく素養を育てる、これも中国の教育が日本の教育から学ぶべき一つの方針性だろう。

日 付：12月4日（火） 10日目

大学名：北京理工大学

氏 名：孔垂輝

今日は朝から雨が降り始めた。私たちはバスに1時間半乗ってキューピー五霞工場に行った。キューピーと聞くとドレッシングやジャムを連想するが、それは同社の中国市場における目標である。まず、工場長が工場の概況と歴史を紹介し、その後非常によくできたビデオが放送された。ビデオの主人公はキューピーのマークになっている天使で、その天使とマメ博士がマヨネーズの全生産過程を案内する。言葉が生き生きとし、最初から最後までかわいい作風で皆を引き付けた。これもヒューマニゼーションの1つだと思う。その後五霞工場を見学したが、印象深かったことが2つある。1つめはフルオートメーションの連続生産ラインで、作業者は10人にも満たないことだ。中でも一番興味深かったのはキューピーが自ら発明した割卵機で、人間の目では見分けられない程速い速度で卵殻、卵白、卵黄を分離する。全生産ラインの速度は1分間240本にも達する。2つめはキューピーのヒューマニゼーションデザインである。キューピーの従業員は繰り返しこの点を強調していた。同社は消費者のアドバイスを常に集めて調査し、それにより細部から自社製品を改善している。例えばボトルキャップの突起、包装フィルムの開け口方向、様々な人の習慣に合うユニバーサルデザインなどである。工場を見学してから、キューピー独自のTS farm—完全制御型植物工場を見学した。この

工場では完全無菌、無農薬状態で栽培を採用し、三角パネル設計により土地利用を大幅に高めている。

午後、慶応大学へ行き、日本人学生と中国人留学生と交流した。慶応大学の教育方法は中国と異なっていて一種の啓発教育の傾向があり、授業は少ないが授業後に読むべき本、完成させるべきレポートが非常に多い。同大学の学生もみんな堂々と自分の考えを述べ、若者のパワーが溢れると同時に思考も十分深く、私たちが学ぶ価値があった。交流の過程で多くの新しい友人にも知り合い、とても嬉しく楽しかった。現在、日中間の関係は緊張状態にあるが、これは両国民間で相互に理解と交流を強める必要があることを意味している。今日、私たちが接した日本人学生は友好的で親切だった。私たちの祖国と一衣帯水の隣国—日本の友好が続くことを私たちはやはり信じている。

日 付：12月4日（火） 10日目

大学名：中央民族大学

氏 名：郭磊

日本に来てもう10日になる。これ以前にも日本の多くの大企業を見学し、多くの進んだ技術を見聞したが、今日の見学先—キューピー五霞工場と慶応義塾大学は私たちの生活により身近である。

キューピー五霞工場は調味料、特にマヨネーズの生産を主としている。ただマヨネーズに比べドレッシングの方が自分としてはイメージが強い。この日の朝食でもキューピーのドレッシングを使っただけである。マヨネーズの生産と包装過程の紹介を聞いた時、同社従業員の品質への追求と顧客への責任感を感じることができた。調味料の味が酸化により変化するのを防ぐためだけに、同社のプラスチックボトルは多層構造で、口部は窒素で空気を排出するようになっている。このような細かい作業には実に感心する。工場見学の過程で、日本企業の高度なオートメーション化と資源の最大限利用を目の当たりに出来た。毎分600個割卵する割卵機の手回し速度は想像を絶し、割卵の間に卵黄と卵白を分ける。その他の作業プロセスも言うまでもない。卵殻の利用にも大変驚いた。卵殻の利用率は100%である！卵殻を使い建築資材を作り、卵殻の中の薄い膜で衣料を作る。これらは、中国では恐らく浪費されている。オートメーション化と廃棄物利用率は高いが、労働需要を減らすことにもつながっている。日本でも現在多くの人が就職難に直面しており、それに相応して結婚率の低下と晩婚化が人口減少をもたらしているが、これも日本政府が解決すべき問題である。見学後、同社で栽培している野菜とドレッシングで作ったサラダを食べた。本当に楽しい午前だった。

午後、ずっと期待していた慶応義塾大学へ行き、親切なもてなしを受けた。一番印象深かったのはやはり討論会だった。討論グループが多数あり、みな文化の異なる国から集まったのだが、同じ大学生の私たちは申し合わせたかのように仕事と就職問題を討論した。みんな自分の未来に関心があり、いい仕事が見つかるよう期待しているのがわかった。現在の日本と中国はどちらも大学生の就職難に直面しているが、比較すると日本の大学の研修はやはり手本として学ぶに値する。例えば彼らは自分が好きな研究会に入り、その中で自分が興味のあることを学び、徐々に物事を処理する能力を養い、卒業後は直接企業に入り仕事をする。それに対し中国ではみんな大学で学ぶ知識では足りないと感じ、研究を続けるか、研修を受けてから職務に就くかで、就職活動の難易度も増している。また日本の教授は関連企業に直接人材を推薦できるが、中国ではこのような現象は見られない。この面では参考に値するかもしれないが、中国の国情に基づき適切に調整する必要がある、そうすれば中国の大学生により適合し、大学生の就職問題をより効果的に解決できると思う。

感動的だったのはホテルに戻った後も慶応大学の学生が交流に来たことだ。彼らの熱意に日中関係の希望を見ることができた。スケジュールはまもなく終了するが、ディズニーランド行きもアレンジされており、とても配慮されている。早めに寝て、明日は楽しく遊ぼう。

日 付：12月5日（水） 11日目

大学名：北京大学

氏 名：倪楊

今日は全日程の中で一番面白い一日だっただろう。なぜなら今日の午後は、有名な「Tokyo Disneyland」で思いっきり遊び回る機会に恵まれたからだ。朝からの晴れ渡った天気、この忘れられない十数時間を運命づけた。朝、部屋の窓から外を眺めると、最初の驚きのプレゼント、東京都の高層ビルの向こうに、忘れ難い富士山があった。やっぱり思い描いていたあの「雪を被った山頂」だった。ただ今回の遭遇には、日程がもうすぐ終わるという名残惜しさも心の中に多少感じられた。どうであれ、この日は良い兆しから始まった。同じく忙しいスケジュールの中、私たちは朝早くから車を飛ばし日本の重要な工業地帯にある「住友化学」を訪問し、工場の概要などに関して説明を受けた。そして今日私が記録しようと思っているのは、道中で見聞きしたことである。

日本の重要な工業地帯に位置していると上述したが、この巨大な工業ベルトは東京都の東部にあり、約70km余りに及んでいる。その中には、非常に多くの化学工業工場が集中している。特に強調すべきことは、すべての工業ベルトは沿岸に分布しており、工場の建屋の上からは、ほぼ太平洋の雄大な美しい景色を一望できるということだ。さらには、工場は、直接コンテナを積み込み出航できる埠頭を持っている。化学工業工場といっても、中国では間違いなく大型重度汚染物排出企業であると言えるが、日本では、工場区域は清潔で生態バランスをうまく保っているのである。工場の区域内には専用の污水处理システムが設置され、隣接した海洋区域はほぼゼロ汚染である。こういった状況は中国ではおそらく想像できないことだろう。

移動の途中、私はずっと何故日本の企業はどれもこのような人的・文化的理念を持っているのだろうか、何故日本人はこれほどの環境保護というコンセプトを実践に移し、しかも、ゆっくりとそこから発想や技術が生まれ、その技術を外国に輸出して利益を得ることができるのだろうか？と考えていた。

答えは間違いなく、多くの要因が相互に作用した結果なので、いろいろあると思う。しかし、その中でみんなが認める最も重要な答えは、大自然が「溺愛」と「破壊」を繰り返す中にいる日本民族は、自身の民族の個性の中に、全てに慎重に対応し、事前に備える、転ばぬ先の杖という芽を出したということだ。そしてこの芽は、日本民族が高度成長した時期に光り輝き、しかもこの生命の源泉は絶えず日本民族と日本の国に付与され、たとえどんなに大きな困難に遭遇しても試練に耐えることができるのだ。

訪日日程が間もなく終わるので、よりマクロ的な視点から全日程の中で日本に対して感じたところを振り返ろうと思うようになった。日本に対する「人から聞いた噂話」に始まり、この10数日間を通して得た日本に対する基本的な理解に至るまで、私の頭の中で「日本」という単語の概念に、すでに大きな変化が起こっている。清潔な日本から、人的・文化的雰囲気溢れた日本、これは私に日中両国の青少年が相互理解を深める必要性和緊急性を益々認識させている。

日 付：12月5日（水） 11日目

大学名：北京師範大学

氏 名：高文

私たちは今日午前中、千葉県にある住友化学の工場を見学し、住友化学の発展の歴史や中国との業務に関する説明を受けた。私は文系出身のため、化学工業分野の専門知識がほとんどないが、企業の社会的責任についての説明が強く印象に残っている。日本の工業分野の企業、とりわけ重工業企業は、生産と環境との調和、近隣地域との調和を特に重視し、また単純に経済的利益を追い求めるのではなく、発展と環境保護及び社会的調和との結びつきに配慮している。中国の企業はまだ多くのことを日本の同業者から学ばなければならないと感じた。

午後、みんなが期待に胸を膨らませずっと待ち望んでいたディズニーランドについてやってきた。私たちの世代の若者はほとんどがミッキーマウスやドナルドダックを見て育ったので、ディズニーのあらすじは私たちの世代の人間に

しか理解できないかもしれない。日本国内の観光客がほとんどで、そして遊べる時間は短かったけれど、みんな限られた時間をいっぱい楽しんだ。そして、自分たち共通の子供時代の思い出に浸った。ああ、明日は日本を発つ日だ。本当に離れがたい気持ちで一杯だ。

人はいつもある場所に愛着を感じ始めたと思ったら、その場所とさよならをしなければならないものだ。こう思うと、自然と感傷的になってしまった。

車窓からもう一度東京の夜景を眺めよう！今度はいつ来られるだろうか。

日 付：12月5日（水） 11日目

大学名：外交学院

氏 名：謝雪暉

朝、私たちは住友化学の千葉工場を見学した。私は理系に関して疎いので、工場見学の感想は表面的なものになってしまった。

まず、住友化学は安全面で大変立派だと思った。私たちが見学した際、ヘルメットが渡され、注意事項が伝えられた。この他には、住友化学は衛生管理の面でも大変優れていた。

午後、有名な東京ディズニーランドに行った。

園内に入り、まずカリブの海賊というアトラクションを楽しんだ。私たちはボートに乗り水路に沿って室内に入った。そこは部屋の中だったが、建物の建っている場所はまるで真実の世界のようだった。人物、建物のすべてがきめ細かくリアルに作られているだけでなく、空も果てしなく延々と続くように作られていて、実際そこに屋根があるなんてまったく感じさせなかった。

もう一つ強く印象に残っているアトラクションは、スペース・マウンテンである。観光客はジェットコースターに乗るのだが、実際に身を置いている場所は「宇宙」である。ジェットコースターは室内にあり、室内は星空、宇宙のようになっているので、観光客はより刺激され、魅力を感じるのだ。

ホーンテッド・マンションもとても魅力的なアトラクションだった。このお化け屋敷では、オーディオアニマトロニクス技術で構成されたリアルで立体的な幽霊がいた。観光客は本当の幽霊を見ているように幽霊を目の当たりにすることができる。

夜のパレードは実に豪華で美しかった。美しい衣装、迫真の演技、きらびやかなライト、心地良い音楽、盛大なパレードの花車の隊列は、園内全体を高揚の渦に巻き込んでいった。

明日私たちは日本を離れ帰国の途に着く。

日 付：12月6日（木） 12日目

大学名：北京理工大学

氏 名：賈鳴

今日は日本での最終日である。

朝、私たちはホテルニューオータニのエコ設備を見学した。污水处理室、発電室を見学し、日本では3.11大地震以後、全国で計画停電が実施されたが、その間、ニューオータニの電力はこの発電室から供給された。見学の際最も印象深かったのは、これまで私たちの印象の中のニューオータニはとてもハイレベルで豪華な五つ星ホテルであるが、今日初めて、その裏には縁の下を支える数多くのスタッフ達の知られざる努力や苦労があるということを知ったことである。

荷物を運ぶ際、私がパスポートをスーツケースの中に入れてしまったので、ロビーにいるwaiterにスーツケースを取ってくれるよう頼んだところ、waiterはにこやかに、上に載せてあった7、8個の荷物を大変辛抱強く降ろしてくれた（私

の荷物は一番下にあったので)。パスポートを取り出した後には、またそのスーツケースを1個ずつ元の位置に戻してくれた。この一連の所作が大変心地良く、温かさを感じた。この12日間、私は日本流のサービスに常に感動していた。中国のhotelのwaiterのサービスが日本と同じとはとても思えないが、外国人が中国を旅行する場合に、最も多く接するのはwaiterである。ならば外国人は中国や中国人に対してどんな印象を持つだろうか、彼らの接客態度や行動がとても重要な意味を持つと思う。

引き続き、歓送会が開かれた。私のホストファミリーも会いに来てくれた。私は彼らと楽しい2日間を過ごした。帰国してからでも彼らと常に連絡を取り合いたいと思っている。

我が家に帰るときが近づいて来た。祖国を離れた12日間、家族や友達がとっても恋しかったが、日本で出会った友人達と離れるのはもっと辛かった。

今両国の間には少し問題が起こっているが、それと人と人の交流とは違うと思う。私たちが誠意を持って耳を傾け、交流する意志がありさえすれば、お互いの間には多くの共通点があり、異なる点も一部あるが、お互いに許容しあい、理解しあえることに気づくと思う。

日本の真の姿が私たちの目の前にあるが、私たちがこれまで聞いていたこととやはり大変違っていた。私は今、私たちが平等に、また平和に付き合っていけるという自信、更には共に発展するという自信をより強く持った。

日 付：12月6日（木） 12日目

大学名：北京師範大学

氏 名：文勝男

今私は飛行機に乗って、今日の一日、そしてこの12日間のことを思い起こしているが、まるで夢のように美しく、その夢から覚めたくない気持ちで一杯だ。お昼にはホテルニューオータニで歓送会が開かれ、また感激した。多くのホストファミリーが歓送会に出席して下さったが、残念ながら中村さんと葵さんには会うことができなかった。でも最後に驚きのプレゼントがあった。歓送会が始まってから、一人の女性が私を呼んだ。彼女は、「あなたのホストファミリーの中村さんは仕事が忙しくて歓送会に出席できないので、あなたへのプレゼントを預かってきたのよ。遊びに行った時の写真のCDよ」とCDを手渡してくれた。全く想定外のことで、とても感動した。2日間のホームステイで過ごした時間がありありと目の前に浮かんできた。中村さん一家の温かいおもてなしを受け、まるで自分の家に帰ったような気持ちになった。中村さんと葵さんは私に日本建築の伝統美を紹介し、日本の国民の友好の思いや親切な心を教えてくれた。このすばらしい時間をずっと大切にしたいと思う。中村さんのお陰でもらった感動なので、また必ず、もう一度日本を訪問したいと思う。ありがとう！中村さん、葵姉さん、お母さん、ありがとう！ありがとうございました。

感謝の気持ちを書いていたら、感謝の言葉を贈らなければならないのは中村さんご一家だけではないことに気づいた。渡辺先生、趙記者、呂ガイド、団長、先生たちみんなに感謝しなければならない。この旅で、いろんな人達にお世話になったお陰で、この12日間がこんなに楽しく思い出深いものになった。この他、舞台の表や裏で支えて下さった数多くの皆さんにも、むろん感謝しなければならない。日中関係が微妙な今、このような活動を実施するのは非常に大変だと思うが、私は幸運にも訪日団のメンバーになることができた。間もなく帰国するが、私は今回の訪日を契機として、さらに努力して日本語をマスターし、もう一度日本を訪問し、中村さん一家と再会し、もう一度温泉に浸かり、ディズニーランドを再訪し、再度日本文化を感じ、再度日中両国の国民の友好を目にしたいと思っている。

PS: 以下は私のささやかな提案である。

1. 日本の古本屋(古い本を売っているお店)の見学をアレンジしてほしい。日本文化を理解するために、読書は非常に重要な手段である。新しい本は大変値段が高く、学生には買いにくいし、そういうお金はあまり使いたくない。でも古本はとて割に合う。文庫本でも単行本でも、100円で買えるのは非常にお得だと思う。

2. もっと的を射た企業見学にしてほしい。企業見学がただ企業の宣伝だけなら現場見学の意義が失われてしまう。私たちはもっと本物の、もっと意味のあるものを見たり学んだりしたい。宣伝ビデオならどこでも見るのできるの

で、遠くから、「わざわざ」時間と労力をかけて、会社に行って見る必要はないのだ。企業見学は、単に見せるだけでなく、一部の企業でもいいから手を触れ自ら体験できる参加型の見学になれば、申し分ないと思う。

3. スケジュールは大変充実していて良かった。毎日日記を書くという視点は大変良いが、実際の状況から見ると、毎日のスケジュールはぎっしりで、ホテルに戻る時間も遅かった。そんな状況で毎日日記を書くことは出来るだろうか？できるとは限らないし、たとえ書けたとしてもさらっと表面的に書いているだけで、深みも幅もないはずだ。そういう内容になるより、むしろ少し数を減らし、質を重視するということで、何日かを選択して日記を書いた方がいいと思う。その数日間は、1つのテーマを見つけ、見たこと聞いたこと、思ったこと、考えたことをすべて書き止め、深く突っ込んだものにするとあるいは別の効果が現れるかもしれない。勿論、これには時間と精力が必要だということが前提にある。

4. 訪日団の参加者の幅をもう少し広げることができればいいと思う。このようなチャンスは本当に少なく貴重なので、もっと多くの中国の大学生、中国の中西部地区の発展途上にある地域の大学生も中国から出て、日本企業を理解し、日本を感じることができれば、彼らの感動はもっと大きく、もっと強烈ではないかと思う。そしてより良い訪日団になるかもしれない！

以上は私の稚拙な見識にすぎず、不適當なところがあったら、お許し下さい。

日 付：12月6日（木） 12日目

大学名：北京化工大学

氏 名：黄改

よしんばもっと多くの名残惜しさがあろうとも、離れなければならない。

私たち「走近日企、感受日本」大学生訪日団35名は、先生方のご努力の結果、順調に且つ成功裏に任務を全うした。この12日間に、私が見聞き感じたことは必ず一つも漏らすことなく身近にいる家族や友人達に伝え、日中友好のために協調して互いに邁進し貢献する力にしたいと思う。

12日前には、私は発展と発展途上との間にどれほどの差があるのかということを意識したことはなかった。しかし、今日祖国へ帰る飛行機の中で、本当に多くのことを考えた。私は、中国の社会や文化意識と似通ったものを持ちながら、これほど異なる日本という国を実際に見て、突然これまでの自分が井の中の蛙だったような気がした。視野がとても狭く、ほとんど物事を考えていなかったことに気がついた。

12日前には、私は、外国留学は非常に難しいことだと考えていたが、同志社大学や慶応義塾大学でたくさんの留学生が自分の夢の実現のために国を出たことを聞き、また、自分で苦勞してアルバイトをして学費を稼いでいるということを知ったとき、私は、自分ももう大学三年なのだから、一人の大人として、将来のために独立すること、強い心を持つこと、難しいことに挑戦するということを学ぶべきだと、深く反省した。ありがとう、異国の友人達。

この12日間、私は日本の食文化、伝統工芸や寺社、近代化、環境保護そして、人にやさしいということを重視した食品、エネルギー、工業、貿易、金融など、各分野のさまざまな事柄に触れることができた。日本は確かにすばらしい国であり、わずかな土地と資源の中で、このように人にやさしく、エコな発展を遂げ、また、あらゆる資源も最大限余すところなく利用していて、大変感服させられた。

今日の歓送会の席上、私のhomestay先のお母さんとお父さんも忙しい中時間を作って私を見送りに来てくれたので、本当に感動した。そして、彼らと離れるのがとてもつらかった。特におじさんは、お昼休みの昼食の時間を割いてまで来てくれた。彼らは私のことを我が娘のように可愛がってくれた。私はこの感激の気持ちをどう表わせればいいかわからなかった。もし私が日本に留学することができたら、必ず再び彼らを訪ねるつもりである。

一生の中で人は何度か忘れられない経験をするものであり、自分の人生の目標を変える転機が訪れるものである。また、luckyな時もあり、より夢の中で生きているような感覚になるものだ。この12日間、私はこういう時間が一挙に訪れたような気がした。夢のような12日間は、直ぐにやらなければいけないことが沢山あることを教えてくれ、私も自分が今まで積み重ねて来たものでは足りない、外国に行って優秀な大学生になるには足りないものがある、自分のやりたい

ことをやるには不十分であること、国に新たな馬力を注入するには不十分だ、ということに気づかせてくれた。私は必ず日本語の勉強を始めると決めた。

最後に、このような機会を提供頂き、私のような農村出身の子供にも外の世界と触れる機会を下さり、私が考えたこともなかったすばらしいものを見ることができたことに対し、中日友好協会と中国日本商会に心から感謝申し上げる。程団長、渡辺先生、呂ガイド、王磊さんと夢妍先生それから陳先生と林先生、ありがとうございました。皆さんの行き届いたお世話により、私は初めての新しい環境の中でも病気をすることもなく、また新しい民族について新しい認識を得ることができ、心から感謝している。皆様は私の人生の恩人である。

日中両国が早くこのぎくしゃくした関係から抜け出し、共に発展することを願い、また両国の国民が幸福な生活を送ることができるよう心から願っている。

日 付：12月6日（木） 12日目

大学名：中央民族大学

氏 名：申東美

今日は訪日の最終日だ。到着したばかりのときは12日間は本当に長いと感じていた。でも、今日になってみると12日間は、まるで夢のように、あっという間に過ぎ去ってしまった。非常に複雑な心境である。

朝、12日間を過ごした東京のホテルニューオータニの環境保護と省エネのプロセスについて見学した。見学を通して、ゴミがどのようにリサイクルされるかを理解することができた。まず、回収したゴミを分類し、野菜果物などの生ごみは機械に入れ脱水をすると泥状の物質になり、これを農家が購入し地中に40日間ほど埋めておくことで有機肥料に変わる。これはとてもエコだし、効率が高い。ニューオータニのスタッフは廃水の利用に関しても紹介してくれた。微生物を使って廃水をろ過して水に変えることにより、水のリサイクルを実現するのである。

ごく短い時間でニューオータニの施設を見学した後、私たちは最後のプログラムである歓送会の準備に入った。皆が二列に並んで入口でゲストの方々を出迎えた。この12日間に私たちが見学したすべての企業の皆さん、Homestay先の家族の皆さんの代表が出席し、私たちを見送りに来て下さった。会場はとても熱気にあふれ、私たちを受け入れて下さった日本の友人の皆さんにまたお会いすることができて大変うれしかった。そして、みんなとの話に花が咲き、非常に楽しい時間を過ごすことができた。

私たち6つの大学は順番に壇上に上がり、12日間の感想や成果を報告した。私が壇上に上がったとき、日本の友人たちが舞台の下で熱心に聞き入り、また私たちのために写真やビデオを撮ったりしている姿を目の当たりにし、とても感動した。最後に、私たち全員が舞台に上がり『海よ、故郷よ』を合唱した。何度も練習したわけではないが、みんな心を込めて歌いあげた。大きな明るい歌声だった。

今日Homestay先のホストである相原さんと奥様が一緒に歓送会に来て下さった。相原さんは用事で出張しなければならなかったが、なんとか時間を作って私にお別れを言うために来て下さったので、とても感激した。Homestayは本当に感動することばかりで、みんな私のことを本当の家族のように接して下さった。相原さんとマリコさん(真理子)に心から感謝している。お二人の事はこれから先もずっと私の心の中に留め、これからは相原さんとずっと連絡を取りあって行きたいと思っている。

日本語を勉強したことのある私にとって、これまでの日本の情報は、教科書で見たこと、他人の口から聞いたものだったが、今回チャンスに恵まれ実際に日本を訪問し自ら体験できたが、本当に百聞は一見に如かずだと感じた。今回の訪日を通して、私は日本に対してより具体的に理解することができたとし、また日本人の持ついろんな面に非常に敬服させられた。

今回の私たちの訪日が日中関係にどれだけプラスになったか自信はないが、もし私たちがお互いに聞いたこと見たことの真実を身近にいるすべての人に伝えたならば、日中民間交流は非常に重要な意味を持つと私は信じている。日中双方は今年、日中国交正常化40周年を迎えた。こういう特別な時期に、また日中双方が困難な局面に直面し

ている時期に、このような活動を行うことは非常に意義深いと思う。

最後に、私に日本を体験し、日本に近づき、日本を感じるというこのような貴重な機会を与えて下さった中日友好協会、日本商会、日中経済協会に心から感謝申し上げます。今後もこのような交流の機会が続くことを願い、また、今回の訪日団の皆さんと連絡を取り合い、末永い友情が続くことを願っている。